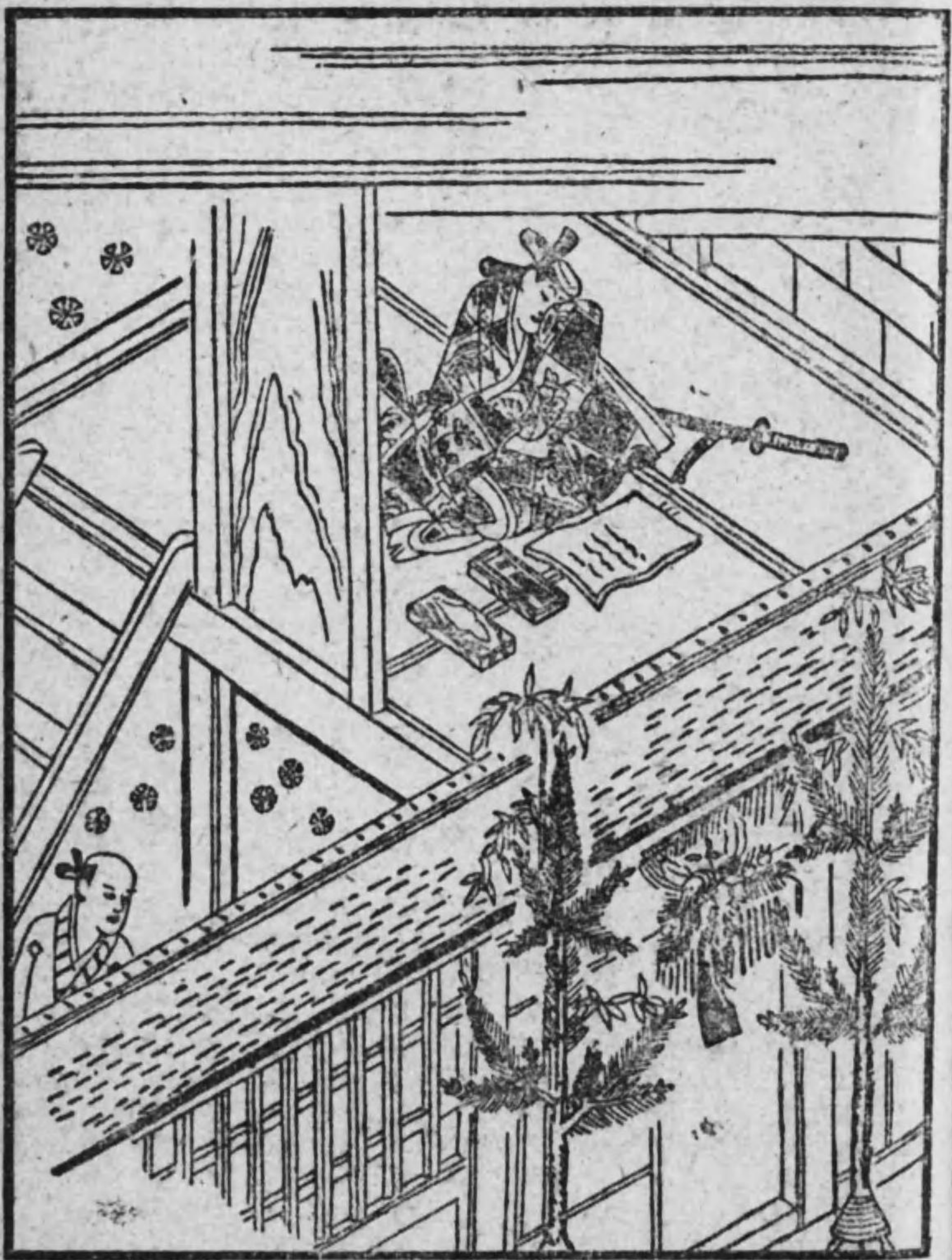


りと聞しに、程なく常の夜も明白み、新六地藏堂を起別れ、丹波より難波に歸りて見しに、南隣楊枝屋に日も時も違はず男子産出して、今日六日とて親類集り、はじめて髪垂る祝言より此子はそなはりて野郎下地なり、仔細は今からさへ鬢付の色濃く、首筋髪際まで此情怪しみ、ならびなき太夫になるべしと、なほ嬰兒總角の比より朝暮大事に掛て育てける程に、はや十三より其分しりになつて、假にも人に惱ませ、調訓の上手、是を戀忍び寄る、戸川早之丞と名によびて大和屋兵衛座に出て若衆方の評、外にかはりて小取まはしに、諸藝を藤田小平次に揉れて、武道殊更にしこなして、尾上源太郎が替りにもなるべき者といへり。そののみ衆道一分嗜み情深く、人の言葉をあだにはなさずして、名の出ぬ程よろこばしけるは其限知れざりき。いつの頃より役者中間に念比分をもとめて年月の心づかひ、それはく是に思ひづけて書には足らず、此念者とは申かはせしも口惜き事ながら、身の勤めなれば、世に知れて途程の大臣は是非もなし。それより外なる浮氣の沙汰なる人には、狂言の仕組は各別、是より脇にて人に手を握るゝ事、神ぞいたさじといひかはせり。何か此心ざし遠はず、其後は銀勤め客もおのづから否氣になりて、彼者次第にかわゆく、酔もせぬ酒に取亂しをかしからぬ座敷、後には人も尋ねやらず、内證氣毒大節季も近しと異見してもなほやめず、極月廿二三日比までうかつかと月夜に夜の明て、其末々は闇になりける。はや初芝居も程なく、舞臺衣裝の物ずき、色々の美を盡



し、天晴此小袖を重ね、手に入し狂言をして見せ、念着めに泣かしてと、心を浮立春を待ける宵に、金剛が萬の心富にせし彼方此方の付届なくて、胸算用はらりと違ひ、三五の十八十九二十度つゝも酒呑荒して、其氣のつかぬ大臣目、大晦日の闇の鬼に囁きたし。され共薬代花代取にやられの物なるに、さりとは悪しと今になつての迷惑、大かたの人には留主と二番鶏の鳴まで遁がれ、兎角ない袖は振れぬといへ共、呉服屋心づく堪念せず、つれなや松の内には急度濟する断りも聞分ず、地衣装も残らず取て歸れば、いふて甲斐なき恨み、むごい仕形と此上ながら分別する内に、南の方より今宮の若夷賣など新し雪踏の音、人の姿も心も春になりて、東は高津の宮の松の葉越に初日常とは替りたる氣色、何心もなく早之丞打ながめて堀江の若水に口噓きなどして、身上を祝ひて歳且の和歌を吟じける所へ、坂田小傳次、山本左源太、大振袖の色香を含ませ、梅か櫻か是ぞ花揃へ、いざ太夫元への祝禮、同じ道にと誘へば喜び、冬より着續けたる小袖ぬぎ捨、けふの肌着は淺黄よといはれし時、金剛まだ隠して、御袖ゆき違ひて皆々仕立直しにと申せば、物靜に聲して我はお後よりといひやるもうたてし。其日も空しく暮て明れば二日のはじまり、太鼓響き渡り、いまだ人良も見えぬ内より、諸職人の弟子たま／＼隙を得て鼠色に五所紋の袖を聯ね、無理ばきの革足袋ふくろぶるを用務なく足早に、言葉せはしく早之丞が盛ふりを見るべしとつぶやき行、其後式三番すぎて狂言はじまるとて、樂

屋より使は來り、衣裝はなし、今はせんかたなく此事を語れば、早之丞打笑ひて、浮世程思ふまゝならぬはなしと、二階にあがるを見しが、筆ばやに其事にはなく書置して、惜きは命、是は／＼と歎きて歸らぬ若衆、さても死れぬ所を少しの義理につまりて武士もなるまじき最後、末々の世のかたり句ぞかし。物は争はれぬ事、子安の地蔵の御詞思ひ合すれば、まことに正月二日の骨佛とはなりぬ。

恨の數をうつたり年竹

芝居子の一座に用捨すべきは年せんさくなり。秋も末の氣色露に時雨の淋しき程もふらず、晝から西日移りて東山の雲に虹の大筋なる、烏編子を着つて行は誰が子ぞ、村山座の御太夫豚ずして光ある玉村吉彌といへり。今が花の都に思ひ懸ざるはなし。其日は衣の棚四六と名に立つ兒人好の誘ひて、伏見の城山へ初茸狩にまかるとて、若衆あまた浮男四條河原を出て、はやくも爰瀬川といふ、むかし讀残せし榊櫻も紅葉してけり。春にまさりて詠めにつゞくうら枯の藤の森の宮處を過、山を南にのぼれば麓に京駕籠をおろして、花紫の帽子姿、松より外に見る人もなければ、編笠とり捨、うるはしき面子に亂れし薄を心ありげに分行くを、思へば戀の山、入初るより袖は滯の盛と、外より見ての浦山敷こそ。想じて傾城は床の内、野郎は道中を慰と、色に馴たる人のいへり。其日も暮近くなりての茸狩、

に見付しを于母にかざして、里ばなれし草庵に入て内を見れば、若衆の文腰張、名書はむしり捨てなほゆかしく、目を留て見しに、文章みなわけのよき事ばかり、此文一人の筆にはあらず、舞臺子の名残ぞかし。此法師むかしは只人共思はれず、持佛堂あけてみれば、眞言宗と見えて弘法大師に菊萩を手向て、其脇に美しげなる若衆の繪姿を掛て、いと殊勝に拜まれ給ふ。是はと庵住に尋ねければ過し事を語るに、案のごとく此道に身を捨て、つらき親仁にふそく、二とせあまり爰に山居の夢にも其事を忘れずと、涙に墨染もはぐるばかり歎きぬ。聞に哀さまさりて、おいくつと年を問へば、我分別のなき時分にもあらず、二十二になりけるとや。それは花は盛にもなり給はぬ御身ぞと、一座の子供までも人なみなれば義理に袖を絞る。其良つき大かたは分別らしく見えける。いづれ二十二より内なるは一人もなし。その中に飛子の時を思へば、さりと古き若衆あり、ついでながら年を問へば、覚えませぬといふこそをかしけれ。あるじの法師のいはく、爰に幸年竹とて、知れぬ年の正直に知る、物こそあれと、彼若衆に年竹を持たせて立せ置き、子細らしく印を結びければ、しばし有て此竹を拍ちけるほどに、皆々同音にて數とりける。十七八九までは何心もなく、それより上は恥かしくなりて、左右の手に力身を置し、随分拍たぬやうにしけれ共、不思議やうちやむ事なく、三十八にしてかの竹兩方へわかりぬ。若衆赤面して、まことしからぬ年竹とかいやり括られしを、法師顔色替つて、

諸佛も證據是に偽りなし、疑はしくば幾度なりとも拍て見給へといふ。此座の若衆尻のはげる事をおそろしく、誰がうつ人もなく座興さめてありける。是から酒なせと初竹鹽焼にして、おのゝ前後を現の枕となし、たはふれける折を見合せ、羽織の無心をいふ若衆もあり、六間口の家の約束するもあり、當座に小柄をもらふもあり、さても手ばしかく取あげるこそをかしけれ。此おもしろき中へ都には珍しき男達、雲の今とぎれと我悪名を申し、枝折戸に入て小者に長刀を持たせ、竹縁にさしかかり、玉村吉彌がうけし盃を是へといふ。吉彌きかぬ顔して有しが、此盃は此中に參らす方がお一人あるといへば、此男堪忍ならず、是非いたたくべし、お看は是にと、件の長刀をとりまはせば、いづれも怖れて詫てもきかず、吉彌打笑ひ、憎さも憎し只はおかじ、我にまかして皆々先へと歸し、吉彌はかの馬鹿男にしなだれよりて、今日のおもしろからぬ事、町人のまだるきつき會、酒ならばかうした殿こそ呑れた物ぞと、亂流るもりかはし、其男の氣をとりて好程にもつてまゐれば、此たはけ寝もせぬ夢の如く成て、いつとなく戀を仕かくる時、いかにしてもむさくさとしたお器、障となりて口ちかせる事も心にかゝるなどいへば、君の御心に入らぬ物面に置もよしなし、小者招きて御氣に入程に刺れと云ふ。とても御事に我手に懸て殿風をよきにと、吉彌剃刀取持て此男の上鬚は残して、物の見事に左の方の鬚剃て、右ばかりありしまゝに捨置きける。萬事覺えず斬あられなき中に、爰を足早に立



のき、京への土産に此男の釣鬚を持って還れば、いづれも大笑ひして、さても手に入し事なり、是を者に酒よといへば、秋田彦三郎即座に鬚舞と囃出し、座中に腹抱えさせける。彼男は目覺して後輩れし鬚を惜み、なげき悲しむ事是非もなき身とて鬚見せをとりおき、此事沙汰なしに還りける。其後見れば勸進的を世渡にして有ける。鬚なき事を思ひやられ、なほ此者をかしかりき。

素人繪に悪や金釘

行春の境の浦の櫻鯛あかぬ形見にけふや引らん、是は爲家郷都には見ぬ眞那鰐飛魚の、生て活動くに目を覺して讀給へり。地引の網は春より折ふしこそ増れと、岡田左馬之助といふ風流者に誘はれ、彌十郎もゆく水、仕過組の瓦右衛門も浮立つばかりに大紋を揃へ、單物を着たる男の肩骨の續く程急がせ行に、人の心も同じ道筋、京の那波屋の誰か、嵐三右衛門もてなし、山の替りの海自慢、細江の浦に網をおろさせ、かゝる氣色を見せばや、駕籠十八挺ならべ立しは、しばし里あるが如し。嵐門三郎齊村小傳次、藤田鶴松其外もみな小供役者まじり、嵐三例の大酒、今宵もまた松が寝惚れて下戸のあらはるゝ迄の遊興なるべしと、指さして出茶屋の吉が許に腰を掛れば、簞笥の下より朝顔焼の天目出して、是まゐれのよし、兼てしるべのよしみ逆、いはで其心ざし、氣を付て見るに、人様の爲にと硯紙

など有ける。此女は大方に手も書て歌學の心も有人の申しき。苦しからぬ酒事にして北の方を見れば、園といふ女の茶店よりかわゆらしき手して招く。上村辰彌嵐今京之助なり。黒の市左衛門付て、是も湊と云所に置網引せて見に罷ると、龜源といふ男連れて行。日も晝に下り、淡路島に影移るを惜まれ見しに、鬢陰に來て鬢の厚き男、立合て靴音のしほらし。昔日光源氏住吉詣の時、此濱にてあそばしけるとなり。又古歌にも、花のえに掛て數ふる鞠の音の、なづまぬ程に雨そよぐなり。きのふは廿八日御田虎が涙雨の名残を、けふも袖はぬれぬ許に降ぬ。風も厭はず毎日爰を遊び所、借銀換貨にて世を渡る人めきて、西の木陰にだんだら筋の幕の内に琴のね、雲井のやどりなど是はと思ふ内に、透進なる女の一人二人立出しに戀を覺しぬ。色黒く足太き酩酊賣も前髪あればやさしく見えぬ。世は廣し今もまだ平。かけて下髪たるい姿を、よりは見てゐる事と譏りて、我らは男色の道を分て笹葺の里つゞき、丸雪松原朴津を過て境南の端の旅鴉屋に、人留る一夜女の立出、水風呂を見せかけて厚黄の蚊帳もかしませうと招く。爰に泊りを定め、亭主は根屋の惣兵衛呼出し、いづれも高野参りなれば、つん。睥き鍋の移香のなきにと云。程なく御膳出しますと、豆腐こんにやく竹の子のあへ物、げに旅の習ひ、此不自由さを忘れなと、それより中濱に行けば、今朝より打下したる手練舟、磯近く引寄せば小舟取なり。生舟波の下を潜らせ、大綱二十四枚放ち掛て、生死の間なく鹽焼にして益を流し、

獵師に小歌を望めば赤き頭を振て、此酒機嫌海陽江の心地ぞかし。樂天が今見ば此智慧なしを笑ふべし。沖の方より浮漣につれて、一尺餘の檜木板に兒人の姿を摸し、身に明所もなく金釘を打て見るにうるさし。是素人繪の證據には、着物左前に目鼻せはしく、母指細く小指太く、不束なる事のみなり。裏板に書付ありて、筑前の國福岡本町貳丁目醬油屋の万吉、十五歳にしてすぐれたる生れ付ながら情知らずめ、我執心を懸けし甲斐なく、思ふ子細ありとて文其ま、歸したる恨み、世に神あらば七日が中に取殺し給はれと大橋流に書しるし、箱崎の明神への願文。萬里の風波につれて今爰に流れ寄、上方にて恥を曝すと、又海に投捨るを左馬助取上て、様子はしらぬ國の事ながら、先此念者おろかなる仕業なり、御存知のわが身なれながらも深く思ふ方の心ざしなど仇にはなさじ、増て常なる若衆の其哀をや知らざらんと、泪實の袖に際なく、彼打付たる釘をひとつづつからぬきて、人しれぬ釘を岩根に隠し、何か科なき身に障の有るべしと大様なる取扱き、若道の本心入ぞかし。此人の事近き比繪草紙につくりて、加賀の十兵衛と申す男は沙汰もなき事なるに、左馬助相果しとは諸人歎きてひと日二日は世に鳴を静ま、此際聞定てよるこぶ。過にし彌生の末に舟遊の歸るさに、難波の橋柱にて指少し疼ませ、血の出る程にもなきを、引割紙にして結びしをみて、心中して切つるはと能名の立事、つねづね男女の心玉に乗て何かなと思ふ故ぞかし。勤めとて指切もあり、契約とて太股に煙管焼するも



あり。是皆客の爲に痛い目に遭ひながら、此事人は知ずなりぬ。左馬は身に入彦子一つもなく其情深し。風俗は上京の町人の男子めきて、萬江戸手代に任せ、東山の花に暮し、廣澤の月に明し、大晦日を知らぬ貝つき、一度もせはしき事をいはず、人の氣を汲て人の友にもなりぬべき者也。よき事見出して語るに足らず、濱の晩景を見捨て、南宗の唐門に入て殊勝に物さびたる寺内、南の森の陰こそ藁藁草に見え渡る玉横野、西の方に蘆の長池にかけ渡したる橋の上、どうもいはれ所ぞと木間六兵衛に寢覺ひらかせみしに、自然と詩繪に虎溪のむかしを書ぬ。法師まじりに是はと横手を打て、いつとなく亂酒になつて前後をしらずなりにき。一人の風流男懷より女のさし櫛をとり落すを見るにやさしく、駿河なる葛の細道かゝせて影櫻の定紋、是は正しく佐渡島やの吉田ではないか、いかにもと戴くを用捨なくもぎ取て、泥中に投ぐれば沈みて跡形もなし。これは國士の費と云ふ。若衆の持給へる楊枝ならば、多くの人を掛て青砥左衛門もさがし出べし。何ぞ遊女の手馴し物を見るもいやらし、兎角は彼色里をやめ分と眞貝になつて異見して、瀬々の淺みを横走る蟹の細かなるを、生ながら看にして酔ては時を忘れ、一閑坊の案内古跡物語も耳に入らず、白藏主の住給へる松林寺の三足狐咄しもをかしからず、まつ毛もぬらさず行に、爰乳森の遊女町、折ふし門立時なれば、もし見られてはと、小女郎手の編がさを先下りにかづき、天王寺屋利衛門といふ揚屋の角なる冷水思ひ出して、井筒に寄て面影を見

れば、此所の四天王に名高き婿婦共、はや見付て禿つかはし、大坂のわるい人様達と招く。女には物いふ事も嫌ひになりしと笑ひ、夕日がざりある遊びそこくにして別れ、濱を見渡せば辰彌は無舟に乗浮れ、京之助は磯傳ひ、左馬は我島の望み、心々の夜の道、遠里小野油火團に、今宮道頓堀の野臺の煙に無常の心玉しばしは静まりしが、疊屋町に歸ると又忘れて、其夜は太夫本與次兵衛座敷仕組、浪江小勘が美しさ、吉川多門が小歌、上田才三郎がとりなり、小櫻千之助がぼつとしたる藝振、吉川源八が若殿、三枝哥仙が禿立、中川金之丞がやつし事、南北三ぶが早口、それくの役付、見る人に笑せ泣せ、上手をするぞかし。若衆方の常成素顔を見るに、偽りなしに見事なる物を、よい國に生れ合せて自由に成事に付て、遠國の金持一しほ哀と帥中間にて申し悔ぬ。

終

男色大鑑

本朝若風俗

第八卷

目録

聲に色ある化物の一ふし

神子の口もあはぬむかしの事

藤田皆之丞勝手屏風の事

女の心たま屋根をとびこす事

別れにつらき沙室の鶏

八人ならびの長枕今は夢になる事

一盛は吉野増りの良見世の花の事

峯の小瀑豊なる身持の事

男色大鑑 卷八

三

執念は箱入の男

菱屋が二階座敷戀にのぼり客の事

文も數重なり千體佛に張るゝ事

竹中吉三藤田吉三思ひを一荷の事

四

小山の關守

下戸も上戸も付ざし嫌はぬ事

山本左源太身請の首尾の事

上村辰彌よい子に極まる事

五

心に染し香の圖は誰

大和屋甚兵衛が定紋の事

藝子は今が盛大臣すがりの事

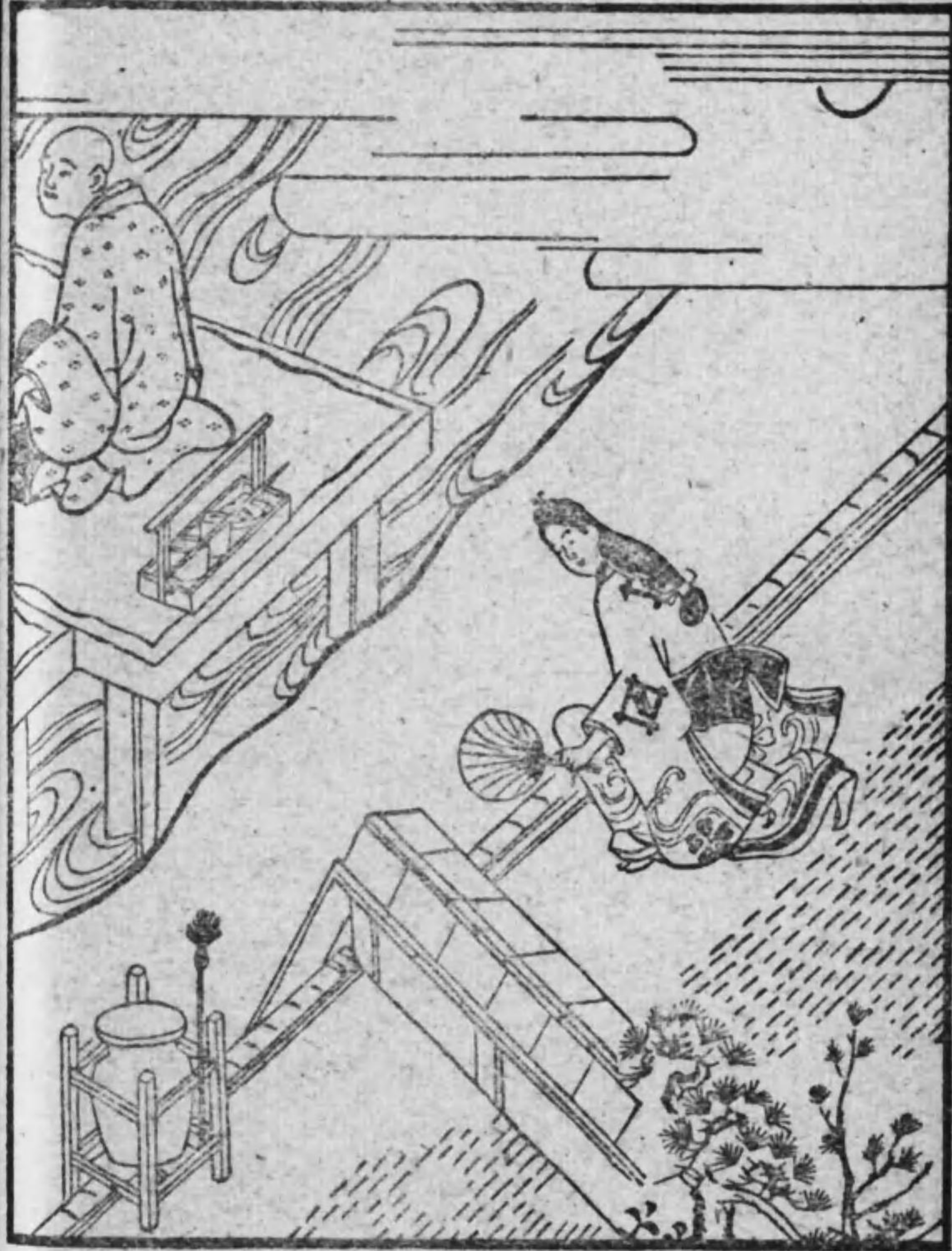
若衆好の目からは美女も元豆と見し事

馨に色ある化物の一ふし

やあら目出たや鶴ほ千年龜ほ萬年、東方朔は九千歳と、年越の夜の厄拂ひが高聲、老の浪立敷寝の舟の春に近づくを驚き、曙はかはらぬに若水と祝ふて、貝洗へばとて寄年の寄らずにあるべきや。殊更縁遠き娘の親、藝子の親方數折煎豆に、又今年の暮けると常の人よりは一入惜みぬ。いづれ若衆の盛四五年の花代、思へ詠める内のせはしかりき。女程久しきはなし、願はくは女がたの藤田皆之丞を生ながら女にせまほしといふ人あまたなり。此廣い都に女はいかなるも有人の沙汰しけるは、是をわる物好といふ、同じくは稀なる若衆に女のまねびさへうたてかりといふ。此道を好けるからはそれ程になくてはなり。皆之丞が忸怩なる風情は先はかづら良、雲まの月わづかに出るに異ならず、まなざしは玉芙蓉を欺き、言葉は巧にして然もやさしげに、萬の事一つとして下に見られず。皆上京の御車の前後に有し宮女の、男珍しきやうに思ひめぐらしたる舞臺つき、偽りを實に見なし、情知らずもいたづらにはなりぬ。男よりは上臈衆に思ひこまれ、迷惑せし事幾度か、され共假にもあらざらん事一生固くかかりき。風俗地衣裝の外に替りて、黒羽二重に白小袖重ねて見る事も飽かず、一度に肌着も十の數を拵ゆる事、今の世の勤子のせぬ事なり。是みな小平次が實ことなる物好、川原の水際立てしほらし。

此美兒、難波の大舞臺松本名左衛門が草も木も靡けし時、はじめの出姿。梅は菅にして匂ひ深く、春やむかしを忘れず、小指に結びし二また竹の縁に引かれて、此君を伴れて天王寺の彼岸に参詣ける。其友とせしは浅香主馬など都の殿とつれぶしの小歌に吞掛、此酔の浮氣に神子町に行て、澤井作之助が亡跡を梅の木のかんに口寄さすも可笑く悲しく、問ふてたもつて嬉しやといふ時、竊に爰を立のく。さりとては義理にも涙はこほれず、什組狂言に泣事、是を思ふに身過程悲しきはなしと、上村門之丞、西川市彌などが舞臺子の時申せし事、是計は至極と大笑ひして、其春の過るも夢なれや、蘆の青葉の風を住なれし浦の珍しからず、京の風ゆかしく涼みにいざと、さそふ水茶屋の後家が見せにて、假初の談合しまりなしの七十郎、云出すからは跡へも先へもゆかぬ石車の伊右衛門、太鼓は持と地はなしがならぬと立行に、江浦の浅瀬に水覺船を寄せて、大臣は勿論おせさよよい是盃踊、右から左りへ移る間に、夕暮はやく石垣町につきぬ。大鶴屋が二階より見わたせば、都とは爰の事なるべし、京の人にも目鼻あり、大坂とても手足はかはらず、小判は爰にも遺しては置かず、別に替つたやうにも思はざりしが、所せきなき涼み床にゆたかなる女まじり、いづれかいやなる風義は一人もなく、目に正月をさせて飾り纏の染出し明衣、御所ちらし、千筋、山づくし、曙島、幽禪が萩の裾書、白鷺が若松色々の模様好み素人目にはあだに見るらん、此夕祇園殿さぞ嬉しかるべし。先すらしめの神樂仕合の木工

兵衛に小語て、人顔の見えぬ時、女中の近き程に床を直させ、皆之丞を誘ひて紋なしの挑灯に面を背き、若衆みな丸袖の羽織をかしく、夏頭巾の山はさながら錦を夜かぶりてかぶらせ、あらけなき作り聲は、狂言作りの平兵衛もそれとは知るまじ。是も亂酒になつて與左衛門が忘れて君の名を呼び、あらはれたる宇治の川島數馬、浪に色散る玉本數馬、連彈の撥音しづかに歌山春之丞も悪からず、調誦の假枕少し夢見る内にも、親仁の精進日は忘れず、宵の酔に驚き口噤ぐなど心ながらをかし。後世もまはり遠し、近道におもしろやと云所へ、夜の編笠はしれ者いたり床にしかけ、伽羅の燒辛下されませいと都なれや花車なる物もらひ、氣を付て見しに花咲左吉なり、色ある床を見に廻る爲にやといへば大笑ひして、今宵は見る程の人みな悪女なり、同じ直段にて陳き方に床を貸すは、しばしなれ共因果といふ。汝が見残し有べしと、俄に末社の商口、火桶は、と涼の頃賣もかはり物、御慰になる碁の相手、一番三文づゝで負に打ます、かみ様方の白髪を月夜影にてぬきます、お若い衆に喧嘩の相手は入ませぬかと聲々噪ぎまはれど、石流納まりし代の例誰構ふものなく、合口は落さぬやうに扇ばかりの風に身を樂しみける。此靜なる人心銀溜て引込所爰ぞかし。猶水上をながめ行きしに、三條の橋より上に世間離れての床涼み、備前焼の茶瓶天目一つ、此外に盃も見えず、皆分別らしき顔つき、洗ひ帷子の尻をまくりて座して二十一間の十露盤弾き、酒肴茶煙草大かた中づもりにして何程と、涼納中の



入用を勘定して是を遊山の種とす。さても隙有男、こんな事にて大事の京を狭くなしぬ。藝子の集禮は、大分の事を算用には入ぬかと、指さして可笑く立歸れば、夜露も更けては袖をいたはり、ちりぢりに床歸り、人の山もはじめの川と成、水の音のみ次第に淋し、東の岸根に役者の聲ばかりそこへに残りぬ。坂田藤十郎が一組、藤川武左衛門が酒友達、嵐三郎四郎も機嫌にして夜半の鐘に明日の舞臺勤めを思へば、身しる川風に聲を取られなと立行。其跡は十三夜の月東山を我物になし、松の梢を照のぼれば、四條通りを蚤の飛も見えわたりぬ。兎角は寝ての樂みと大臣は銘々の兒人を慰み残りぬ。濡の相手なしの身は宵にかへらぬ事をいふては悔み、同じ蚊屋に生男計のなれば枕、別して口惜かりき。今からも陰子隙あらんと思ひやられ、おかぬ棚をまぶり、石垣町の燈火に姿の障子に移るをそれこのもしげに見しに、立つまじし茶屋の棟より、麗しき女の縮の廣袖に黒鬘子の前帯、髪ときすて中程をかい結び、金の房付團扇を翳し、思ひよらざる風情、晴たる月に不思議晴かたく、獨りも魂はなくて心に観音經など讀てしばしあるに、此姿消もやらず軒端に近寄て、誰とは知らず人を招き、情知らずと云ふにぞ疑ひなく戀とはしられける。おのく身に覺えなく胸の噪ぐ中にも、こんな目にあふ事ならばと思ふ。かの女悶えて、せめて言葉のかへはしないかと、泪袖を傳ひて白玉を數に碎きし。我ながら我文をなげつけしに、上書に多古の浦袖さへ匂ふと有しは、皆之丞への思ひ入、一しほ哀さ

まさり、せめては盃事よと、太夫に無理飲して軒口に投れば女嬉しげに戴き、間なく投還して、爰は虚盃ながらお一つと屋根より歌ひし小歌の聲、此あたりに隠もなき井筒屋のお娘か色移りによくたといへり。とがむるにも非ず其まゝに明行空の名残、男女に限らずかく思はるゝは此君美しき徳の一つなり。

別れにつらき沙室の鶏

鼻は人の面の山なりと古詞に申傳へし。男女に限らず高下あつて、思ふまゝならぬは人の良つきぞかし。むかし末摘といへるもの、すぐれて鼻醜かりしに是も美女となんいへり。それを思へば二つどりに低きより高いに徳の有べし。鎌倉新藏も童戯なればこそ人も見ゆるせ、昔日松本名左衛門、中比に宮崎傳吉、今の峰の小澤いづれも美少人、其時にいたりて花は盛りの客に惱ませ、野郎の仕出しに姿をうけて吞つる事、今も身に添て忘れがたし。中にも此人役者子どもの手本、よき衣裳を着はじめける。此事千里までもかくれなき、虎膚鳶の羽織ばつと沙汰し侍る。勤子の唐織を着始めしは是を手本に、イロホ形曆小紋袖を争ひけると、平川吉六も有て過たるむかしを思ひ出せり。其時は名に橘の小島妻之丞、彦十郎といひ、小野山主馬は宇治右衛門とて、こはい良して今京の見物事になりぬ。

それらのみ三原十太夫、柴崎林左衛門、澤田太郎左衛門、櫻井和平など皆根強き立役勤めけるが、これらもむかしは若衆ならめ、岩倉萬右衛門、松本文左衛門、山本八郎次、かづら姿見し事を思へば久しき事にはあらず。松本間三郎も小膳といひしに、今は噴方の太郎次も置綿、時々の所作とてかくも移り替る物は狂言役者、染之丞は忽兵衛となりて世を渡り、常左衛門も以前に見違へ、梅の助は六左衛門と呼ばれ、主膳は六郎右衛門と云男になる。庄太夫が三味線も死ぬれば聞ず、沖之助が事いひ出すものもなし。是を思ふに一日も浮世ながら住るが徳なり。慰みさまなく見たり聞たり、十柱香すれば力をも入ずして楊弓の星の林、夜は又遙なる音羽山の鈴虫、相坂の轡むし、住吉の松虫籠、是も秋の末より蝶つくはやらし、和朝にある程の事を色品詠め盡し、沙室の鶏合いさぎよく、有時小瀑沙室の鶏を集めて會を始めける。八尺四方にかたやを定め、是にも行司ありて此勝負をたゞしけるに、よき見物ものなり。左右にならびし大鶏の名を聞に、鉄石丸、火花丸、川ばた草駄天、しやまのねち助、八重のしやつら、磯松大風、伏見のりうん、中の鳥無類、前の鬼丸、後の鬼丸、天満の力蔵、けふの命しらず、今宮の早鐘、脇みずの山櫻、夢の黒船、髭の奥、神鳴の孫介、さゞ波金錠、くれなるの龍田、今不二の山、京の地車、平野の岸くづし、寺島のしだり柳、綿屋の喧嘩母衣、座麿の前の首、白鳥なし公平、此外名鳥限りなく、其座にして強きを求めてあたら小判を何程か捨ける。小ざらし



心にまかせ三十七羽すぐりて是を庭籠に入させ、天晴此鶏にまさりしはあらじと、自慢の夕より憎からぬ人の尋ね給ひ、いつよりはしめやかに床の内の首尾氣遣し給ひ、明方より前に、八つの鐘ならば夢を惜まじ、知らせよなど勝手のものに仰けるに、勤ながら眞言を語る夜は明やすく、長蠟燭の立事はやく、鐘の撞出しきのとく、太夫餘の事に紛らかせ共大臣耳を濟し、八つ九つのあらそひ形付かぬ内に、三十七羽の大鶏聲く響きわたれば、申さぬ事かと起別れて、客はふだんの忍び駕籠を急がせける。名残を惜むに是非もなく、泪に明るを待兼ね、おのれら戀の邪魔をなすはよしなしとて、一羽も残さず追拂ひぬ。是などは更に分の若衆の思ひ入には非ず、情を懸し甲斐こそあれ、過にし春の海中國の人吉川多門に深く陸れての別れに、川口まで見送りし泪、其夜寒空雨となり風と成、袖の外迄ぬれしを厭はぬ風情、思ひくらべてかわゆさもまされり。いにし律師覺範の、多門といへる童子に恨みずばの歌よまれしも、こんな事の思はくぞかし。

執念は箱入の男

田代如風は千人切して、津國の大寺に石塔を立て供養をなしぬ。我又衆道に基づき、二十七年其色をかへ品を好き、心覺えに書留しに既に千人に及べり。是を思ふに義理をつめ、意氣づくなるはわづか

なり、皆勤子の否ながら身をまかせし獨りくの所存の程もむごし、せめては若道供養の爲と思ひ立、延紙にて若衆千體張貫にこしらへ、嵯峨の遊び寺に納置ぬ。是男好閑山の御作なり、末の世には此道ひろまりて開帳有べき物ぞかし。有時備前の人々仕馴れし國かた、浦々の春の浪、牛窓の白魚、虫明の瀬戸の海月、琴の泊のあみ海老、是を看に明暮小島酒もおもしろからず、孔子くさい良つきは所ならひにしてをさめすぎ、先の知れたる命の程を思へば羨みなし、都の櫻ちらぬうちにと、風も船の爲には嬉しく上れば、安居の藤も今といふ時の鐘、明れば芝居を見果、暮れば品定めして晝の面影忘れぬ野郎招ける。いづれはあれど座敷は菱屋六左衛門が濱二階、東に名山、石垣町筋向ひに四條の橋を目の下に、爰又京の中の京と云所なり。今宵の遊興常にあらず、有難き美形の集り給ふ中に、百體頭とて御姿の優れて拜まれ給ふは、竹中吉三郎、藤田吉三郎など神代このかた古今の稀者、悪い程難粗の見よげなり。なほ移香に心のとまる袖岡政之助、歌の一ふしは惱みもとひ光瀬左近、外山千之助、此五人打込て是ぞ今の世は色づくし、物いふ花山に入、春の夜のならべ枕、身をそれに馴れて調誦女に替はる事なし。はおもふにひとしは分の衆道やさし。衆道は互の心ざしより固め、命を其人に捨置き、自然の時の後柝共末々の頼母子づく、此君達はたのしみもなく、然も心底覺束なき初會より其身を客の物になして勤め給ふは、地若衆の情深きにまされりと、人の氣の附かぬ所に心を働かせ、師良

なる法師の無用の詞に興有過てよろしからず。やれ共愚になき太夫子の付合、少しもしらけずして酒事殊更に募りぬ。亭主も廻りの悪き盃の時呼出せば、あひく申て數算なり、偽りなしに酔出て料理自慢の長上、申しもあへず片づけられ、大かたは夢になれ共眞言はわすれずして、もはや吸杯は宵から六色か、今一度桂川の柳魚に松菜をあしらひて、蓋茶碗にて輕う出せ。其跡に水溜て深き鉢に櫻の花を浮て、生貝を角切にして先細の箸を添て出せ。色座敷は仕掛ばかりの物ぞ、錢三十の物が小判貳兩になるを知らずや、我才覺一つで十三人口四十年過るは、世間の人様に惡からず思はるゝゆゑぞかし。別して今宵のお客他所の御方、太夫様達も今の都の晴なり、お手が鳴らば猫までに通事させよといひ寢入にする事、二階に聞えてそれくの身過と一しほ可笑かりき。其後は我若あらはれ、酒に馴れたる君達さへ色あそびの色に出、紅の寢道具に移り、ひとりくの身振、先竹中は淺黄かへし下着に中は紅鹿子、上に鼠しゆすの紋付、白らしやの羽織に小鳥づくしの唐衣の裏を付、八所染の胸紐解て白糸の長柄ぬき出し、左の少し身をひねりて座して、笑へる口もとの曲むになほしにらし。藤田は白小袖の上に我名の色を含ませ、紫ぢりめん二つ重ね、なほまた羽織帯迄も同じ色の帽子しめやかに身をかため、息づかひまで氣を付、自然と若衆に具はれり、筋目あらばよき大名の道具なるべき人柄も今、行末の藝の事迄も岩井半四郎と素面の時沙汰し置ぬ。京にうれしがり、大坂に請取仕出しな

り。袖岡は黄なる肌着に青茶椀茶の烏揃へ、ばつとしたる容氣さながら女のごとし、其物ごしたまたまに聞人は作り聲共思ふべし、かしらから濡ものに誰か否といふはなし。光瀬は白き下着に薄色の中形、縫分縞のうね帯、萌黄の袋うちの柄糸、なで角の金鍔、髪結さまも一際目立て、鈍き所なく人の好る風儀有。外山は紅の色濃く白地に書繪の東海道、賤き馬方も此君に繋ぎ、川越も此戀に沈み、身の上を白川橋にまことの旅人の聲もして、鶏も客の立時をつくり、頂妙寺の鐘無性に撞鳴らし、其數は百八やら八十八夜の名残の霜、三月廿八日の更行袖の冷かに、遊ぶにあかぬ男性惡といへ、扱それにはちつ共構はぬ世なり。なんのかの燻味噲で又酒よと云時、門の戸敲明て是を二階のおのおの様へと、進上箱ひとつ渡して其使は見えずなりにき。座敷へ持て出ての不首尾、先から名をいはぬもかしこし。此方に問はぬも利發なり。見えわたりたる所杉の箱なれば菓子には極れり。晝あひし役者に此趣向は語らず、誰かは氣付ておくりけるぞと近付思ひ出すに、藤本平十郎、彌原平右衛門、杉山勘左衛門、板田傳才なども知らぬ事なり。扱は天から降たる一箱と大笑ひして、明もせず其に捨置ぬ。程なく太夫達の向ひ駕籠とて聲噪がしく、いづれも心の残らぬ別れ、また晩も約束してあふ迄の淋しさ、君立歸られし跡にてとんと寢たが最後、尾も頭も覺えず五人ながら枕も定めかね、いろくの夢みる時、最前の箱の中より吉三くと諸聲のする事疑ひなく、皆皆聞耳立て起出れば、箱に音あつて



おそろし。され共利かぬ男蓋とつて見れば、姿人形の角前髪、いかなる人の作りけるぞ、さながら目つき手足の力身生たるものごとし。なほ氣を付て見しに是に添狀あり。それがし此あたりの人形屋なるが、此形一しほ心を込めて作り、看板に立置し事年久し、いつの比より此人形魂の有ごとく身を動かしける事たび／＼なり、次第に奢付て此程衆道心を移し、芝居歸りの太夫達に目を付侍る、是さへ不思議なりしに夜毎に名をさして其子と呼ける。何とやら恐しく外には此事忍び、川原に流しけるは二度なれ共いつとなく宿に歸りぬ。木の端の物いふ事前代ためしもなく、聞傳へし事もなし。我物ながらさりとは持餘し迷惑なる折ふし、藤田竹中兩太夫殿其座に御入を見及び、是を遣はし參らす。又の世迄の咄の種に試して見給へと、たゞしく書付ける。其中に大かたなる事には驚かぬ男進みて、人間に挨拶することく、おのれ其身をして若道の心根やさし、兩吉三郎に思ひ入ありやといへば、忽ちうなづきしを、いづれも我折て興を覺して、宵の慰みあだになりぬ。子細らしき人十面つくりて語りし、是とても侮るまじ、そも／＼人形は垂仁天皇八年に野見大臣是を始めて作り、人のはたらきを得たり、唐にも后を見て笑たる傳へも有。此二人すぐれて美見顯れたり。かゝる形の物さへ思ひ入けるとしばらく感じて、いまだ枕に有し捨盃を取上て、是皆君のお口の添りし跡ぞと載かせて、惣じて此人々を諸見物おもひ入し其數を知らず、とても叶はぬ譯有と成らぬ子細を小語ければ、人形ながら合

黙したる貝つき、其後は目もやらす思ひ切ける。これさへ此聞分のある賢き世に、親の異見を尻に聞き、野郎狂ひに事募つて家失なひ、所を去り、飽かぬ妻子に暇の狀を遣はし、都を立て江戸へ行ばとて、一升入壺に埋み金もなし、さりながら一代跡の減らぬ金の棒あらば、一荷にして持たき物は竹中吉三郎、藤田吉三郎、重い軽いなし兎角千枚分銅。

小山の關守

西國三十三所の觀音、五番は河内國藤井寺の開帳、天和三年四月に參詣せんと、重といへる人俄に誘ふ水、夜前の寢貝洗ひもあへず、法師の徳には髮結ふまでもなく、駕籠早めて難波寺の五つの鐘の鳴時、殊勝さも今日は御命日にして御靈屋のよそほひ寂光淨土、爰極樂の東門過て行に、其一日は世上の鳴物止れば、なほ又芝居の役者子共の隙也。思ひ／＼の袖を連ねし折ふしは、衣裝の御法度かたく守りて、随分日立ぬ仕出しなれ共、形の山更に櫻は花に顯はれ、舞臺子は鬢つきに知るゝぞかし。やうやう平野の里、大念佛の御堂に休みしに、宵の約束遠へず森といふ男、按摩取休古を述て來るにぞ、一しほ可笑さまされ。それより春野の名殘草々の花分衣、歩行路おもしろく程なく参りて、下向に小山といふ里の方にやどり求め、さらば此所に關守、今日詣でたる子共を一人も殘さず留て酒事よ



と、軒の番屋に毛氈しかせ、色にとめる酒林と札を立て、立役の源右衛門を目付とし、文作の三味線引かけて今や〜と待所に、澤村小傳次をかしがらせ、竹中半三郎に無理酒を汲かはし、小松才三郎に心を残させ、尾上源太郎が病氣を浮し、彼是十六人、日も暮々の長座敷、はらりと立行跡はもとの在所となる。牛は黒し、木綿は白し、人の顔は赤く西日を争ひ立出るに、爰に兄弟の女がた同じ伴を別れて、吉彌は堺に、辰彌は大坂に還るに、道すがらの野夫出茶屋も、今朝より優れて美しきは定めて上村辰彌ならめと、名をさし當るも眞言なり。よきもの人も知る事ぞと最上人も、商口を出して、萬に買物心元なし、買てあがりを體に請る此子より外なしと、胸算用違ひはないか、手をうて打もせいと大笑ひして、心は戀のはじめとなれり。ならぬものならば人死絶まじし。同じ勤子の中にも心ざし各別に違へり。親方の爲と計うか〜と客に身をまかすも有、かく假初の執心も大かたならぬ氣づくしと、其人を疎かにせぬこそやさしけれ。親類にも合力せぬは金銀なり、むかしは情も深かりしに、いつぞの程より分里の女の如くなりぬ。爲以の念比は各別、大臣に小宿にて逢ふなど、盃のうちはかるなど、追付紋日を拵へ、八日十二日は三津寺の薬師、十五日は八幡、十八日は清水觀音、役日も定め毎月むつかしくなりぬべし。女郎も野郎も時花に懸かるがよしといへり、同じ事にて萬に付てよい理なり、さまざまにいふは情しらず、さりとは能くも勤めの身なり、一疋の蚊のくひ所、わづか物の立しも人は身を惱ませけるに、義理にもせよ、欲にもせよ、數の定りてそれ〜に役有指を、よう〜切事ぞと哀さげしぬ。唐國にも身の血を絞りて酒となし、世をわたれる傳へも有酒屋に、山本左源太わけのよき餘りに心中あらはし、指を切しをよろしく取沙汰して名を今に残しぬ。諸事を聞に右近源左衛門に有し時より情深く、世に隠れし人のむかしを尋ね、なるまじき事共見し人泪をこぼし、聞くに譽ぬはなし。勤めの若衆もかく亦あれば頼もし、是さへ世間の噂にやん事なし。上村辰彌はかり染客の出合に、座もしめやか過て盃のまはりも遅く、おもしろからぬ折しも、誰いふ共なく無用の心底咄し、聞に指は切られまじき物と何心もなくいふ、聞て事によりては命さへ、まして指などはさのみ驚く事にもあらずと、笑ひながら座興なれば、皆々聞も尤めずよの小歌になりぬ。辰彌立つかと思えしは、脇指ぬきてさし枕に拵指をあて、音もせず押切り、心しづかに身仕舞して是を看と投出しけるに、おのおの是はと興を覺し、跡の事共悲みけるに、いつよりは機嫌よく噪ぎ遊び始めて、扇引なんど心にかせし、さりとは落着きたる身の固め、いはで人々心をこらしける。是を思ふに全く慾に非ず、無分別といふ人は除て置きて、なるべき事かと思ひめぐらす程膽に銘じ、古今の藝子の上盛、萬人共に思ひつく事、此人先生にていかなる種を蒔て今の花の咲ける知らずかし。

心を染し香の圖は誰

江南の橋を江北に植そば忽ち枳かいらしに成替るといへり、さも有べし、和國にも其例あり。江北の赤頭の
 子共を江南の金剛こんがうが手に懸くれば、程なく太夫髪となり、あれが其かと思ふ程の姿、人はまた作るに
 色をましける。いづれか悪きはなしといへば、美はなほ希といへり。太夫本をはじめ役者中間にも幾
 人か抱えて末を見しに、今の舞臺を踏程の子は千人にひとりなり。容見かたみよけれども心疎し、あるひは
 賢くて藝にならず、三拍子に揃ひかね、親方たふしかずを必ず物になりぬべきと思へばわづらひ出し、
 あぶなきものは是なるべし。是思ふに金銀何惜かるべし、兎角は命を延るの薬代なり、煎じ機常の各
 別にかはれる所有。風情は若道にして、心ざしは其まゝ上臈じやうにひとしく、物堅き所を去て語るにあら
 ず。昔け衆道といへばあらけなく力み、言葉に角を入、大若衆を好み、身に疵付るを此道となしぬ。
 それをも傳へて分子迄も双物業無用の事と云迄もなし。今は山玉の祭さへ血を見ずに神輿も渡らせ給
 ふ。武士も具足の入らぬ御時なれば、まして色座敷へは瓜割も出ぬがよし。西瓜も勝手にて切り、皿
 盛にして濟事なり。たゞ弱々としたるを當世の若衆といへり。江戸にて藝子の小紫とよび、京にて
 かほると付、遊女の名も物やはらかにして聞よし。袖島市彌、川島野馬、櫻山林之助、袖岡今政之助、

三枝歌仙など、美しきが上に女のごとく紅の脚布する事戀を含みてしほらし。明れば芝居人、暮には
 樂屋歸り、銀つかはぬ人も澤山に見ればこそあれ、紋所を覚え、名を知るぞかし。よき藝者なれ共鈴
 木平左衛門、山下半左衛門、内記彦左衛門、幸左衛門など歸るにはさのみ氣を着る人もなし。櫛着物
 の廣袖に薬鍋下げたる子共、下地も二つの折の髪かみの結振むすび、はや目を付ける。殊更人の姫子内儀らしき
 人迄も千日寺のあたりに立嘆て、まゝならねばこそいたづらに心はなしぬ。過にし比勝尾寺の開帳に、
 大和屋甚兵衛誘ひて參詣しけるに、中津川の舟渡を越て、北中島の宮の森に駕籠立させて、煙草よ茶
 などいふてしばらく休みしに、後よりいまだ十六と見て十五なるべき美女の、黒襦子の大振袖に賣づ
 くしの切付、帯は白綸子につばらくの緋鳥ひどりに紫糸の網を懸け、物好なる後結び、水色の絹足袋にばら
 緒の薬草履、緋ざやの二幅蹴返しにほのめき、おとし懸のはね髻ももむい、すかし形のさし櫛、金銀延分のべわのか
 りがい、淺黄地の金入にて裏を打し菅笠に文反古の紐を付、着たる所の采體さいたいいづれに一つ悪き物好な
 く、ありのまゝなる素面萬にいふべき所なし。左の方に衣を着たる比丘尼、右の姥らしき人身に添ひ、
 腰本中通りの女迄も皆色めきて振懸、乗物つらせて押へに五十あまりの親仁、若き男壹人大脇指の出
 立町人とは見えける。彼娘是迄は何心もなくたどり來しが、甚兵衛を見合はせ、上氣して袖をかへして
 見せけるに、香の圖の染込紋、有々と見えしは出來心にはあらず、それよりもだゝとして足も立ず



して、我の宮のある里より其人は駕籠に乗せられ、美形は見えず別れぬ。又縁あるにや御山にしてめぐりあり、目もと惱みてあとを慕ひ來るに、さまざま御寶口かきこき法師の縁起、馬の角を蜂がさしたら大事か、牛の玉も割たらまよ、天から降たる佛様も有がたからず、あの人をと殊勝さうに娘の見る良ばせ、かなはぬ戀なればいたはし。此女を持つ男の身になる事もいやなものなり。是衆道ならば命かへりみるにはあらねど、おのゝ女嫌ひ洒落中間、なんとも思はず下向して、其夜は紅葉見し櫻塚の落月庵にて、物がたき俳諧の興行、伊丹河の池酒のもてなし、此里は折ふし飛子もありと是を云しらけに立歸るに、道すがら子細を付し女に袖觸れし事うるさく、天満川にて垢離をかき、女を見し目を洗ひ流し、皆々道頓堀へ歸りぬ。明れば戀のはじまりより芝居の果迄、衆道の外の噂もいやなり。此道私ならず三國のもてあそび、天竺にては非道といふも可笑、震且にては押蹴とたはふれ、吾朝にては衆道専らに榮んなり。女道あるによつて鈍けし人種つきず、願はくば若道世の契りとなし、女絶て男島と改めたし。夫婦喧ひ聞ず、悋氣治り靜成時にあふべし。

男色大鑑 第八卷終

男色大鑑第八卷終

貞享四年正月吉日

大坂伏見兵服町波屋橋筋

書林 深江屋右中兵衛

系三系通 山崎屋市兵衛

江戸日本橋本町
萬屋 清兵衛

懷硯解題

四編の雑話集の一つで「諸國咄」と同じやうな著作である。水谷氏云く。

大木五册

版行 貞享四年花見月初旬序

挿繪 吉田半兵衛

製本 竪六寸四分 横五寸七分

本文 粹 六寸三分 横四寸七分

行數 十二行

序文はあれども、西編の名はない。と説明してゐられる。私はまだ本書の原本を見る事を得ぬ。諸國の雑話、怪詭奇異等の話を書き集めたる、短篇集であつて、後世の諸國咄の元祖である。

懷硯 卷一 改訂について

懷硯、是れも原本を見つけかねたので流布本によつて收めたのであるが此分は流布本も誤は少ないやうである。其後、此「懷硯」が「西鶴筆の初染」と改題せられて今西鶴の作として出版せられた。しかして序文や「柱」は改められ、又新に加へた物語も有るが、しかし西鶴の板木を其のまゝ用ゐたものである、但し一つ一つの目録も變へてゐる。此度、此本缺本二冊の寫眞を得たので其で校訂して出版したのである。先づ序文は眼に「遮程の物皆亡人の筐となりて色々衣の袖干あへぬ中に一目玉鉢といへるは昔西鶴回國の道の記也。是を見るからに與風思ひ立即先師の跡をおひ、そのわたりかしこのとまり行衛さため宿もなく只行人征馬を友として天地元來我有なり。諸國はまた我家なり關の戸さしもあけ通し青鞞裏にも止まらず、足にまかせてかけまはる程に忘しがたくてや日を経て古郷に歸り声響る窓の前にそこ爰の事共思ひ出るにまかせて書つゞれは愚成筆の初染全部五冊になりぬ。是只兒女の泣を賺す種而已。

寶永二酉年正月吉日

難波

金西鶴

〔印〕

筆の初そめ卷之一目録

① 出雲國女かたきうち

(新加)

おこりは小判卅匁

おしきは墨染のそで

② 善悪ふたつの堺町

朽てくちぬは武士の心底

二度世に出しは娘の才覚

③ 浮世を渡る鱗舟

むりやりにさす献々の盃

はかなきは夜明のかね

④ 鎌倉はひなの都

世にたくひなき花の姿

色はすたれと思ひはふかき心中

既刊本 (①②は削られて新加③となれり)

⑤ 長持には時ならぬ太鼓

コレガ初染⑤

⑥ 案内知つて昔の寢所

コレガ初染⑥

懷硯の改訂本に就て

讀本の改訂本に就て

④ 人の花散る抱槍の山

コレガ初染④

録の初染卷之五月録

⑤ 形見は天句の爪跡

口は八十てとふやらこふやら無縁の男
似た物は鳥にて可愛かる夫婦

⑥ 内證を問屋の花聲

銀箱は秋の蝶鳴もなかれぬ思ひ
義理にはそはすほれて持縁の妻

⑦ 喧嘩は血染の降物

骨子神の八十末社西の海へさらり
針の導敵の糸筋を知る事

⑧ いか成種や上野ノ櫻

寺から里の小判の色奇成哉妙成哉
裏からまはる懸幕が表にあり

既刊本

① 卯の似せ男

コレガ初染①

② 明けて悔しき養子か銀筥

コレガ初染②

③ 居合も闘すに手なし

コレガ初染③

④ 織物屋の今中將殿

コレハなし

⑤ 調代の盛は江戸櫻

コレガ初染⑤

以上の如く成つてゐる。初染の柱は「華」とのみ成つてゐる。元來此本に就ては書名「懷規」が元の名かど
うか、水谷氏の西鶴本には

本書丁附の上にある小書に「宿」といふ字が彫つてある所を見ると、初めは此「宿」といふ字に結び付い
た外題で、後に「懷規」と改題したのではなからうか

と有る。多分そんな事では有らう。

何分にも「録の初染」は一冊を四つの物語づゝにして改正して闘り立てたものと見える。

懷硯

懷硯序

雨の夜、草庵の中の樂も、旅知らぬ人の詞にや、亦人のいへるあり、知らぬ山、しらぬ海も、旅こそ師匠なれど、我朝なく草鞋の新しきを頼み、夕々油單の垢馴る、をわざにて置くは、外の濱風を身にふれ、胡砂吹く夷が埃にも、塗れにしは、親にも告げよこいひし、島守も身をなし、生の松原、箱崎の並木の數も、よし覺ゆるに、或は恐しく、或は可笑しく、或は心にこまる人の咄を、整短き筆して旅せぬ人にこ如左。

貞享四年花見月初旬

懷硯 目錄

卷一

一 二王門の綱

明けて悔しき鬼の宮入の事

二 照を取る晝舟の中

祈れど聽かぬ骨牌大明神の事

三 長持には時ならぬ太鼓

留守の娘利波を出だす事

四 案内知つて昔の寢所

一夜に替る男妾の事

五 人の花散る瘡瘡の山

衆道に身代立つ事

卷二

一 後家になり損ひ

懷硯 目錄

西鶴全集

心の駒は將基に好入る事

二 付け度物は命に浮桶

一足飛の地獄海船に乗る事

三 比丘尼に無用の長刀

武士は義理の恥かしき事

四 鼓の色に迷ふ人

覗きおくれて窟知る事

五 椿は生木の手足

都のお客に醫盡し見する事

卷三

一 水浴は涙川

一度に五人女房去る事

二 龍燈は夢の光

見開れぬ面影の海の事

三 氣色の森の倒石塔

どら猫遺恨の事

四 枕は残る曙の縁

一月彌堂の事

五 誰かは住みし荒屋敷

姿繪針刺となる事

卷四

一 大盗人入相の鐘

身の隠家烏籠に極むる事

二 憂目を見る竹の世の中

頼母子掛けて戸の論明くる事

三 文字すわる松江の鱧

結の神もまよならぬ事

四 人真似は猿の行水

懷硯 目錄

- 子故 俄發心の事
- 五 見て歸る地獄極樂
- 法師の輕業命勝負の事

卷五

- 一 佛の似せ男
無筆無念なる事
- 二 明けて悔しき養子が銀筥
思はぬ身代の事
- 三 居合も騙すに手なし
室の色町喧嘩の事
- 四 織物屋の今中將姫
通力の神も筆の事
- 五 御代の盛は江戸櫻
袂から裏金の事

懷硯 卷一

一 二王門の綱

神貌の畫に驚き、我入つて下りぬ。日暮れて道を急ぎ、何國を宿と定む難きは、身の果敢なやと思ひこみしよ
り、修行に出で給ひ、世の人心、銘々木々の花の都にさへ人同じからず、まして遠國に替れる事ども有りのま
ゝに物語の種にもやと、旅眺、海廣く、言葉の山高く、月よりは其よ、見る人こそ違へど、面白をかき法師
の住所は、北川等持院の邊、閑居を極め、獨に結ばぬ笹の庵各別、構へて、頭は霜を梳りて散切となし、居
士衣の袖を子細らしく、名は伴山と呼べど僧にもあらず、俗にも見えず、朝暮木魚を鳴して、唐音の經讀みな
ど、菩提心の發り、懸迦や達磨の口眞似するうちにはあらず、唯誦、代りに聲を立つるのみ。不斷は精進、陰
あるに任せて魚鳥も餘さず、座禪の夢覺めては美妾頭に誘はれ、鹿子の袖の吹返し、留木の鬮さく間、紙袋
の抹香の香移るも、煙に皆無常の種、始めて狩衣の裾短く、草鞋に石高なる京の道を踏出せしに、更に張笠の
上に音なして、降、續きたる五月雨。黒木賣の渡、絶えて白川の棚橋埋み、爰に目馴れぬ家程の浪重なりて岸
根の崩るゝを嘆くに、水碓まりて堤の切れかゝり、里人太鼓打續き、末々の枝川、諸木も葉付の筏を流し、三條
懸手凍しく頂妙寺の神門につき、佛壇、自らの流の題目となれり。寺中法師の腕立も叶はず、南門崩れて二王

も浪につれて口開き口閉ぎ、青き息をつき給へども、誰取上ぐべき様なく、岩角に當りて終に碎けて淺ましくなりぬ。日も暮に及びて、七條通の町人に樵木屋甚太夫と云ふ男、薪の行く水につれて、熊手にして掛け上げけるが、彼の二王の片手を取上げ、律義に驚き、召連れたる男に、鬼の腕といふ物なり、是家の重寶、かまへて沙汰する事なかれと、竊かに宿より半櫃を取寄せ、是に納め、俄に注連飾りて内蔵に納めぬ。鬼の手を拾ひしと云へば人皆興をさましぬ。然れども此の人日比鹿末なる事とて言はざる者なれば、いづれも見ぬ先に積手を拍つて、是末代の語句なれば見せて給はれと、町内にて年久しき人譬へ命を取らるればとて、世に望みなしといふ者あり。又若き人は前後かまはぬ無分別、身體よろしき人は斟酌して是を見ざりき。彼是十一人見々に極め、女房に暇乞の盃し、鎖帷子着るもあり、重代を差すものあり、又は節分の大豆を懐中するもあり、棒乳切木長刀、思ひくゝに振撥げ、身震はしながら是を見んと辨くは、今も愚なるは世の人そかじ。既に夜にもなれば、見る時も今なるべし。亭主は人よりも、更に身を堅め、手燭燈して蔵に入り。是なる櫃にあり、蓋を開けると立ちかかれば、各目と目を見合せ、四方より取廻し、櫃の内を覗きけるに、不思議や此の腕誰が目にも動くと見えて、氣を失ひ、我と持ちたる刃に怪我して大きに惱みける。此の事沙汰して、其の終夜洛中の人々門に市なして、見る事を望みぬ。明日日頂明寺の二王と知れて、夜前の事のかしき、假初事にして世の費となりて、此の男を二王門の綱とぞ申しける。

二 照を取る畫舟の中

人の身は露がぬ舟の如し。伏見の濱の浪枕爰に一夜を明して、晝の下り舟あらば大坂までの便りと詠め渡れば、昨日夕大方の出舟の跡淋しく、京橋の旅籠屋には疊扣きたて、茶筌置は衣片敷きてうたゝね、蕎麥切舟牛房も焼き絶えて、床髪結さへ所の若者の角ぬいて居るなど、此里も日の内の隙をかしく、問屋の門鞠を見て居し時、播州より改めて飾の舟下るといへば、法師といひ旅と申し、夢も結ばぬ暫しが程、便船の斷り聞いて、情ある人々は洞の間、乗移りければ、我は火床の前に身を進めて人の背笠にも觸らず、船頭にもよい天氣と機嫌とり、豊後橋を下し楊枝が島を過ぎて、淀小橋を越えて、男山の姿もいと殊勝に清濁るをもかまはず、素人語又は山崎通ひの小歌、浪に聲忙しく十里が間の慰み、播河兩國南北の川岸柳に鳥も面白く、一村の神母五十人程小舟に乘行くは、六條殿参りとて有難く可笑く、心々の人附合。此の舟四人して借られけるに、一人は播磨の淨土坊主、此一度長老になりての歸るさ、一人は近江の布屋又は長崎の町人、今一人は大坂長堀邊の材木屋の二子なるが、親は匿れもなき始末者、久しく貯へ置かれし金銀を色の道へ使ひ捨て、幾度か異見せられて止事なく、二十二の時勘當にて江戸に下りて、其より越中に立越え、自らにふた鹽の山、年月世をかせきて身の辛さを忘れず、此の五年餘りに金子三百兩仕出し、なき商ひの道油断なく、流石は上方人として北國人此の風俗を真似て、所の費なれば大坂へは歸さじ、爰に取留めてなどと乞聲にして、追付縁を結ぶ時、難波の古き友達、信濃の善

光寺参りの折節廻り逢ひて、互に昔を語るに盡きず、今は二親の嘆き給ふを話せば、故郷忘れ難く、其人に詫状を上せば、母の親殊更に戀しがりて、鬼角歸れとの仰せに依つて、越中の出見世租方に仕舞ひ、儲け溜めし金子を見せ、親に悦ばせ申さんと、乗櫓葛籠に入れて、其の外絹綿の土産物、錦著、歸る心地して、今日の舟路も遅く、酒菓子代物も乗合の仲間として物堅く一錢の事までも目子算用に、いづれも旅功者なる摩者、損徳なしに皆をあげ、まだ大坂へは舟の上六里半、收方あたりより身拵へして竹杖までも取廻し、萬事に氣を付けるうちに、舟人が樽米櫃より、布袋屋骨牌の、十馬八九の足らぬ取集め物を出だしければ、小者共一文二文に讀みて、程なく跡先に四五文づゝ置きて、手元忙しく勝負しける。清兵衛下人越中より召連れたる男、百差皆になして發銀八分に即座に賣つて是も打込めば、律議者にて上氣してうろたへたる貌つきをかしく、取返し取らすとて清兵衛立掛り、てんがうにするうちに、錢八百負になれば是切とい、所へ、橋磨の長老進み出で、後生大事に捻りければ、九品の淨土かふとて、衆生残らず根から取れば、一向に置きかけ、つゝ豆板一步穿鑿になり、長老六七兩も勝ち給へば、近江の布屋左出で、長崎の人大氣に掛かり、三番まきに付目取つて山の如く置き立てしに、次第に募りて千兩ばかり。小判彼方此方の手に渡れば、船頭吉御器出して、くらをうたせけるに、是さへ金子十兩餘りぬ。舟に急ぎもやらす下しけるに、雨上りにして水早く、程なく長柄川に来て、大坂が見ゆるといふ時、清兵衛三百兩残らず負けて、越中より親達親類への遣ひ物、絹綿、直打して、皆々負になりて、川崎を渡越とて有りたけ置いて取られ、舟は八軒屋につきて、長崎人御機嫌よくあがれば、置きて船磨の長老の仕合、百兩餘りも勝ちて、此の度の京の入用をしてやり、不慮によき同船を致しましたと念比に暇乞をかし。布屋け小判十四兩と絹綿取つて盞紙包にさせて、舟より足早に上り、小戻りして船頭を呼びかけ、草鞋掛が片足ある筈しや見てたもれと、是まで取つて歸る。清兵衛跡に残りて船頭に色々嘆きて、てらの内より金子一歩、錢二百貫ひて、舟より直に長崎の親の元に行かずして、又身拵へして明荷物を小者に持たせ、通々古里に歸り甲斐なく、徒足にて越中に下りぬ。假にもせまじきものは博奕わざ、家を失ひ身を捨つるのひとつ、是ぞ前蓋一三つがあがるにしてからせまじき物ぞ。

(以下改訂)

三 長持には時ならぬ太鼓

老若しばしの氣を移して、生死の堺町を見物人は今もしれず、息引取は墓なき借笠を片手にして、圓座所せきなく數十人の白つき、都であひ見し近付とはひとりもなし、世界の廣き事のおもはれける大かたは侍のつきあひなりしに、鞆とがめ詞論も絶て静なる時津浪、笛鼓うちおさまりて、是が今日の猿若勘三郎か出て三拍子そろひ袴の座付、玉川千之丞が狂言とて、人みなしはふきをもやめて是一番と待見しに、京で聞たる聲にかはらす面影のかよひ小町、むかしを今に見なし果の太鼓に立出しに小芝居に播磨が六道の森、閻魔鳥は是じやと簡板たゞき立る中に、西國風の勝手を爰に出し町人を白眼まはせど、すこしも恐るゝ人なく、かへりくらはして當言いはれ、無念かさなる折ふし穿人らしき男、はたちあまりの風情物やはらかなるに短刀を落しさに、綱笠さきさかりに世を忍ふあり様して、十二三の治良に紙子の廣袖鈍子の衣裏はさなから指指袋をときて掛たるやうなり、是物好とは見えず詫での草履取手を振りさみもなく、主人につゞきて通りしに彼わかもの頭に手をさして、小人嶋の鑓持と見立て、悪口いふにかまわず、其程過しに跡よりにきたつて奴子が鼻をつまみあぐれは、せつなかりて赤面する時たまりかね覺悟して、ひそかに小者を宿にかへし、八丁新荷橋の中程にてむかふより聲をかけて取前の狼藉おぼへたかとひたりの肩先より切落せば、残る四人おとろきしばらく扱もあはせず身ふるひせしを又壹人鬘さきを切付首尾よく立退を、廿番手

柄を見るより心して門うたずして通しける。三人漸々氣居て彼者を一筋に追かけしに、裏地の末小屋掛町まで逃のび、次第にけはしくなつて御手の草薙の内にはしり入、たゞ今追手のかゝる者、身を隠してたまわれ万事はたのむといへど答ふるあるしもなく、十五六なる娘形のやさしけなるがひとり留守して東あかりの窓のもとにむすほれし糸とき捨て立出、其草薙をそこに脱括たまへ裏よりぬけ道ありといふにそ、前後おぼへす忍び行。其後娘は長持に立寄り細ありげに鏡をおろし、時、三人はしりつき此家なるはとみたれ入、見まはせは其人なし扱は此の長櫃に隠せしに極まる。いそひで出せとつめかけしに娘すこしもさばく氣色なく、いかなる事ぞ我はしらす人の家に断なしの癖者、壹人もあまさじと扱ふるびたる長刀おつ取切てかゝる。女に手むかひはならず三人ともに身をひそめ難儀の折から、近所の人々あつまりてとやか詮議の所へ、二親御堂より下向して父は肩衣かけながら母は綿帽子とりもあへず、是はと娘にすかりはしめを聞とゞけ安堵して、親仁三人の者を引つけて我今こそはあか以前は瘦馬にも乗、鑓鏡の二筋もたせて、豊田長五左衛門と名をよばれしが、今かくあさましき住家なればとて、娘ばかりの内証に入て存外せしゆへなし。おのれはら世の控をそむく物取なるべし。さもなくば主人を申せ其まゝはかへさじといふにぞ。三人道理にせめられさま／＼手をさけて人をあやめしものをつけ込切ふし長持をしめさせ給へば心のせくまゝにあやまり申と。段々詫言聞とゞけてしからばさもあるべし。おの／＼心掛りは此長櫃の中なるべし。ちか比見するも恥しけれど此上にあらためぬは武士の本意にあらずと鑓取て蓋をよけ三人のうち壹



人に況せけるに、あわれや卑人のありさま衣類の入物なるに辻なしの傘一本日光挽のはした盆、飾の繪圖の破れ、藝古乗の木馬袖付の紙合羽、ぬり足駄置の太鼓、ひとつも錢になるものはなかりき。皆みなみかねて立歸る。三人の者も礼義をのべてわかれぬ。其後ことなくしづまつて夕暮かたになつて、長五左衛門つれあひにかたられし人の難儀はいつをさためかたし、けふの迷惑思ひもよらすむかしならばたとへば、かけこみものなればとて天晴出しはせじに、其時くをさばきて長持の恥をさらせし事よと、抹袖の相口にぎりて汗をこぼす。娘も今あさましき親の御暮し、おもへばいと女心の乱れけるをしづめ、けふの御難儀はみつからがなす事なり、子細は是も卑人らしき侍の血刀さげてかけ入、たのむと云一言見捨かたくうらへぬけさせ、長持に入たるやうに見せかけ、其隙に逃のび申べしと存、追手の者の氣を取ひと、此事意細にかたれば、長五左衛門夫婦手をうつて、女の早速には扱もくと我子ながらたのもしく、是に付けても卑人うらめしく、日敷をおくるうちに、今は買べき道具もなく、うき秋九月の節句前になりて、なをく菊の霜枯に一日をくらしかね、世の人は千とせをのぶる盃事水を呑力もなく、此ま、朽果る身のなりひ、日影にうづむ昔の石にて手をつめたることくになりぬ。はや九月七日の夜武藏野の月清く、品川おもての海照て、遊山舟の歸さに遠音の糸竹、心はそれにうつりて頭を振て擧うたうたへど、きのふの腹にてけふはさひしく、置の棚をまぶれと風もあれぬ宿のかなしく、妻子のこころをしをおもへば、ながらへて甲斐はなしと、常にもてなし、磯に出、小島宿にてこころもをつくに、

足よは車の膝ふるひ出、手先に力なく、死ぬる事さへ我まならずして其口惜き、武運もかくまでつきぬるものかと、地に伏てなげきぬ。娘はおそきを案じてたづね見て此ありさまにおろき、さりとては御卑氣なりはかなくならせ給ひ母は何とならせ給ふべし、世わたりの種は是にありと、袖より金子五兩取出し親たる人にわたし、娘ははいくれに見へずなりぬ。母又是をなげき、たづねへきたよりなくそれより二三日諸神を祈給ふにふしきやあり所のしれける。此嶋つときに隠し遊女ありて、契を當座切にさもしき事なるに、是にあたら身をしづめてわづかなる金銀にて、二親をはごくみぬる心さし、艶しくあわれなり。其日より髪かたちをなをし水あげといわ井ける。その客に成人は屋敷形の小者中間、又は渡海の船頭、入王子の柴賣、上下宿の六尺、願人坊主、あるひは肩の上の商人、向嶋の野人、はけもなく入みだれて一生うき流れの女となる所へ、長五左衛門かけつけ、親の合点もせざる娘をかどわかしてと、ねたるにかへつて取を思ひ、いまだ其身に染らぬさきをうれしく、前金かへしてつれ歸り、扱もあぶなき仕合いか親を思へばとて、我子には淺ましき心底なり、名こそをしけれ命は夢の間のありなし物、ならびて宵後と、夫婦の中に娘を置、一度に歸かけて自害をする時、門に馬乗物の音なして、歴々の侍内に入、それがしは杉戸馬馬といへる卑人なりしが、此たひ古主へ八百石にて歸參いたせり、すぎし年息女に命をすくはれ、あやうき所をのがれ本國下り、首尾のこる所なく此事一門にかたれば夫こそ群の縁組なれ、其斷りを申入、御不足なりともそれがしを聲になしたまへと、是非に申うけ夫妻にさだめて、互によ

ろこびのはなの時二たり運をひらけるこゝちして、娘もろともに引つれ、霞が關へ越て奥筋にそ下りける。其後長五左衛門も古主に呼かへされ、本知千石とれば、誰も見捨てたまはず弓矢の家なかくすたらす、武士はたのもしきものにそありける

四 案内知つて昔の寢所

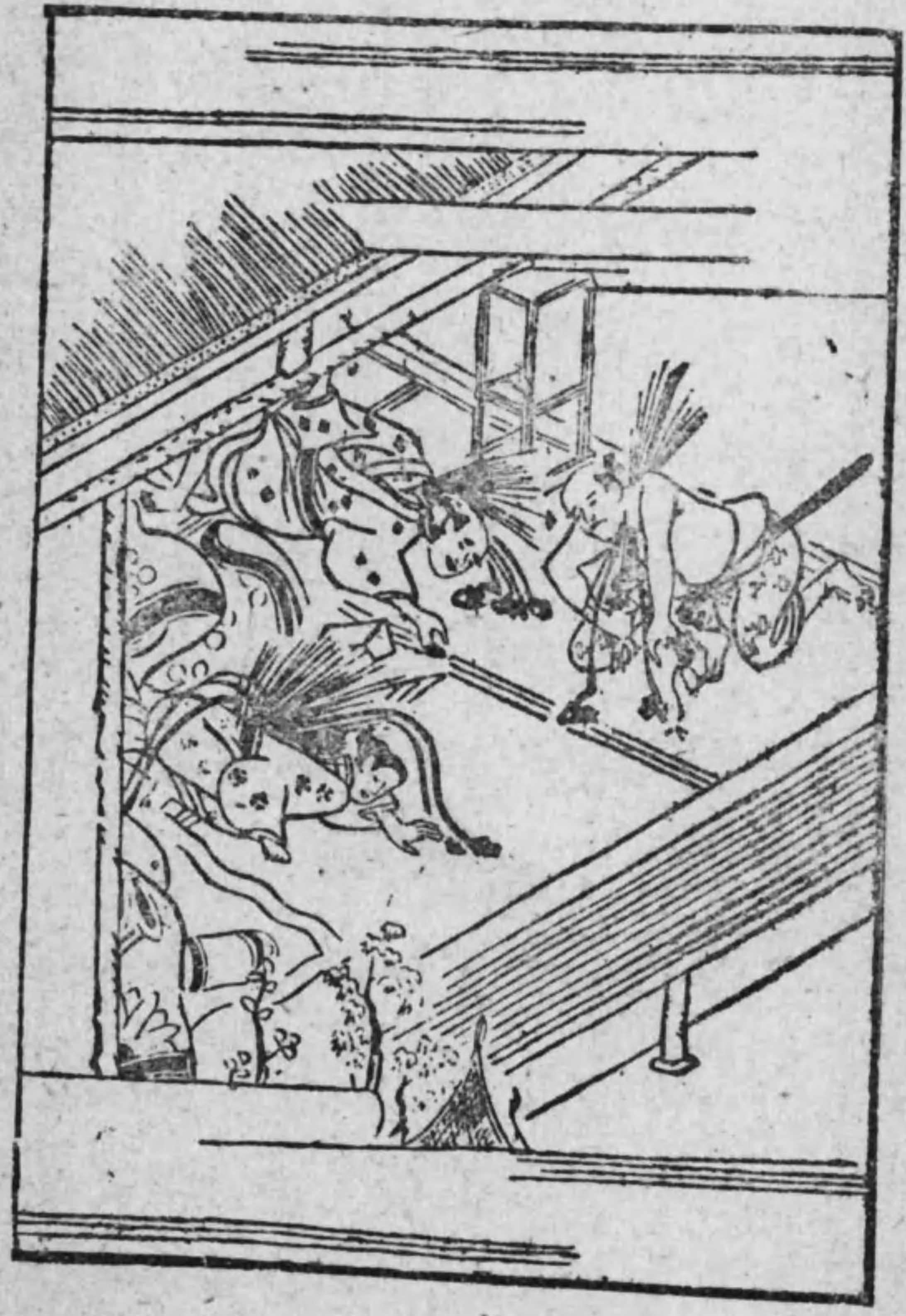
然路嶋かよふ衝のなく屋に世のあわれ見る事あり。家嶋といふみなどに舟かゝりして、一夜をあかすに、さりとはおもしろからぬ所なり。わかしの小舟に花の家じまとは何か目に見へてうたひけるぞ。春さへ櫻もなく秋の夕暮の心して、浦の若屋に立よりけるに、女あつまり茶事してたのしみ、ありふれたる煙そしり咄しすへき者が、物毎いそく事には仕違ひありと、分別らしき物かたり何事ならんと聞に、此濱の鹽人に北岸久六といふものありて、毎年鯛網にやとわれ東の海に行事あり、いつもは犬勢組して下りしに、過つる秋は人すゝます、勝手つくにて我一人下りぬ。ひさしくたよりの事もなく、其身無筆なれば、おのつからに世をそむきて親類にも氣遣をいたさせける。其年の秋日和あれて、鹽舟あまた損じたと風の吹やうに聞は、さては久六も世になき人となりけるかと一門なげくにぞ、人の口にて背後まざくと見ざるやうに申なし、ひとつれに二百五十拾人、外海にて相果しとや、當年は心がよりなりしにくだらで、仕合とみなくいふにつらさのまさり、なげく中にも女扇の身にしてはひとしほかなしさもまさり、明くれ是のみにして、

命も捨る程に思ひ込しかは、女心のやさしく聞えぬ。然も久六は入聲なりしに夫婦のあいさつよく、二親に孝をつゝせは身の程おもはれ此男ををしみぬ。その多も立春過て、一とせちかくしれされば、いよく死んだにうたかひなく、里を出て行われし日を命日に、それくの僧を供養して、のこりし物をまこと親もとにかへし、それが事は次第にわたるゝならひぞかし。かくて女もわかし此まゝに後家よしなし、世間にある事なれば後夫もとめて親の心をたすけよと、色々にいさめけれとも、申く女は合点せずちりくゝに髪をもおろし、せめてはなき人のために香花の心ざしふかく、うき世をふつと思ひ切しを、おのくゝさまくゝに申なくさめ親へ不孝第一具非と至極させて、むりやりに又も入縁を取組、けふこそ吉日と祝言をさだめける。男は、同じ浦の鹽師小嶋の木工兵衛といふ人、久六よりはよろつに生れまさりてふそくなし。二親のよろこひ親類のいさみ、二たひの入聲、かゝる濱邊も務著る事目習ひ、女はつけのさしぐし献々の酒もりなかばにいつくも情氣はかはらず、いふせき板戸に際うちかけ、おとろかす事幾たびか、それも夜ふけてしつまり、寢所に木枕ならべたがひにうちとけて、久六が事はおのづからわすれて、木工兵衛かはゆがり、此時の氣にうちまかせける。此宿のみなく、霧の草臥に明の日までゆるりと長寝して、月さしあけぬ所へ、久六旅姿して立歸り、案内しつた良に立入、久しくあはさる女ゆかしく寢所に行ば、雨窓より影うつりて見しに、しどけなき枕のさま、髪もわかしよりはうつくしく、此浦の美人なるものとすこし自慢心して、蒸臥に夢おとろかせは、女興をさまして泣出せば、夜著の下より木工兵衛出て御

惑。久六いなものになり、是はとあらためけるに、段々はしめ語るにそ大かたならぬ不首尾、因果といふ
 は是ぞかし。人も多きことさら木工兵衛は久六と年月遺恨のやまさるものなれば、悪しみつねより深くあ
 りて、久六分別して先舟吹ながされ奥の海に行し難儀をかたり其後こゝろしづかに女をさしころし、木工兵
 衛をうつて捨其刀にして其身もうせける。鄙びたるおとこの仕業には神妙なる取置ぞかし。

五 人の花散る痴瘡の山

縣姓、險處捨生涯、暮鐘爲執促歸家。扇下に空く留む二首の歌、白菊としのぶの里の人とは、思ひ入
 江の嶋とこたへよ、ときこえし鎌倉山、明もやすらんと道急旅人も、爰の氣色に立とまり、其墓に哀れを
 催ふしぬ。都て世の常なき様は、よしあるものゝ名のみ残りて幾人か消、如水沫泡焔と御經には説給ふこ
 とわり思ひつゝけて行ば、日蓮上人の土の籠、今は妙久寺の庭に形ありて、星降の梅枝纏りながらいと殊勝
 に、匂ひ殊更に異なる花のながめ。櫻にまさりて人の山を崩しぬ。其中に色形すくれ、此生れつき鄙の都は
 是なるへしと、人の機をうはふ美少年。若黨三三人めしつれ嫺娟たる容、色見る者假初にも惱ざるはなかり
 き。爰に戸塙専九郎といへる罕人も、春の日かりのわりなく、長閑なる折からのうきたつ心に誘はれ、其人
 なみに此所に立まじわり、寂前より此若衆に意魂をうしなひながら跡を随ひ、歸るさの屋敷まで滯込、あ
 たりの家立より、此隣の門簾へなるはいかなる御方と問は、あれは武藏より渡らせ給ふ御醫居所にして、





大谷右馬之助殿と申侍る。今上所から歸せ給ふは、其孫子左馬之丞殿にて、此比御見廻に上りての御逗留とつぶさに語るを聞届け我屋にかへり、猶し弘増戀の柵涙川のふかくぞおもひこみ、佗しうき住居のたちる苦しく懃ておくる日敷のとけしなく、傳手のたよりもなければ、明暮これを案じわづらひしが、元より此専九郎子細ありて身軀かせぐ身にもあらず、只獨の渡世には善結り、甲斐なき命をつなぎて上手の名を得しにある時、左馬之丞僕共を聞およびて買に来たるを、それともしらす烟草なと吞て一つふたつ四方の咄の次而に思はず時ありて、渡りに舟使を得て一命を抛て頼みかゝれば、此男なる程それ淋のおもひならば、肝煎べしといふに嬉しく、過し比よりのありさまを書つよりおくりければ、左馬之丞見て、まことに賤しきものとあれば、還而しほらしき心根感じ入、返事して、それより深き契約となりぬ。左馬之丞故里へは病氣故當所の谷くの景を心ばらしに詠むるよしいひやり、専九郎に別を歎のみ也。かくて歳半たちて、左馬之丞例ならず煩ひ四五日過て病瘡面に顯れ、分ておもかりしゆへ家來迄氣遣ひ心地安からず、されとも専九郎は右馬之助が前を憚りて見廻ふ事にまかせず、はや廿日に餘れば痲乾で湯かゝりしに、面を脱たる如く其跡は菊石大かたならず、つきくの者まではしめの左馬之丞ともおほへす。世にまたあるまじき器量忽變じて二目とも見られず。自身も心もとなきにや鏡にむかへはしらぬ不若家かとおもはれ、此見してふたゝひ専九郎に逢事のはづかしく、武州木柙祢宜町へ人を遣し、我に似たる者あらば尋ねつれたちて来るべしといひやれば、金次第にて取違へる程の美少を上しけるを呼付て、其方は専九郎殿に行て

何成共似合敷用を聞、よく奉公すべしとつかはすに、専九郎も是に心をかけず、たゞ此三十日のあいたの對面なき戀しさのみ胸にせまり、幾たび此ものを見まわすれともつき戻し、今一處違て思ひをはれ度とばかりいひしに、左馬之丞扱は道たてたる男我今の容を見給は、年比の執心もさむべし、されともそれ程に思ひ沉まれなは逢べしと、ひそかに屋敷に呼て此ありさまを見するに、専九郎涙をなかしかくも委のかはるものが、夫ゆへ色ある者を我にめしつかへとの心ざし。なをく戀まざりて、みづからも只に疵をつけ懸身を無器量に持さげ、弥々深きかたらひ、かゝる衆道の骨髄むかしよりあつましき心懸と、皆々感じぬるもことほりぞかし。此事過し年の暮よりの取むびと、目谷の竹下右衛門といへる男のつぶさにかたるを門拾にして目ぬ

懷硯

卷二

〔〇以下六六頁まで未改訂〕

一 後家になり損ひ

越前の國永平寺は、後深草院建長年中に建立ありて今に法音絶えず、其の流派を別ちて久しく、山は世塵の遠ざかり、いと殊勝に開山道元禪師の御影拜し廻りて下向すれば、爰は府中の里、越の街通には家居勝れて椽を翳き軒を並べ、煙寛なる町造目立ちけるに、人宿の女袖に縋り、日は早七つに下ると引込みけるに、何處も一夜の假枕、旅の寢覺の淋しく、明日の夕の里までの事、命は知れぬ行末、思ひ續けて明し兼ねたるに、主の物語るを聞けば、此の所分銅町會根齋屋甚九郎とて、始は裏店借りて草履を作り、鍋取賣など誰知らざるものなし。然れども其の身一代に稼ぎ出だし俄分限となり、今は三ヶ所の家屋敷職、肩を比ぶる者なく、其の弟甚助甚七も幼少より國里隔て、賣られたるを呼返し、手代分に家を治め、日に増して榮え、行末頼もしかりしに、差瀧の弟甚助、兄に代りて萬づしどなく、商賣そこくになして然も色好みなるより、商事に託け三國の港へ通ひ初め、一度の節季の帳前度毎に三五の十八散と違ひて、次第増の不足、大きく慮くところありて、甚九郎も度々異見するに聞入れず、はや彼所の初川といへるを請出すに極りしと、脇より是を告げしらせたるに、堪り兼ねて、内證勘當して追出しければ、外に行方もなく、哀れに呻吟歩行しを、母の不便増り、甚九郎が目を見

びて、死なぬ程の貢して、同じ所の傍に裏店借らせて置きぬ。かくて年月重なり、或時甚九郎徒然なる雨の日淋しく、日比將基好みにて六ヶしき詰物の圖を案じける程に、朝の四つより七つ半まで詠入り、さても今合點が往た、是で詰む物をと、吐息吐きながら呻きける音したるに、何事と女房駈付けて見れば、はや目を見つめて冷汗瀧の如く、南無三寶といふ聲に驚き、母、甚七も下下も、是はくとはかりに醫者呼びに遣りて、口を開かずれども開かず、鍼たて血をとりても出でず、一搦灸する音なく、終に息絶えて、脆きは人の命、是は如何な事というたばかり、各呆れて、老母の嘆き一方ならず、女房も四年の馴染なれども子の一人もなく、先づ近所の同行四五人駈集り、是非なき浮世の中、一度は我も人も、かうなるに定り事、嘆きて返らぬに、念佛の一聲が最早叱の上の爲なりと、老母内義を慰め、先づ片脇に押寄せ、屏風引廻し燈火をあげ、寺へ人を遣れば、坊主來りて旗天蓋の書付、諸行無常の一筆、六道の蠟燭立を削る、沐浴の湯の下焚きつける。下女は涙片手に團子の嚙を挽き、久三郎は野草鞋の鼻緒を著る。脇差に紙を巻き、中通りの女は經帷子を縫ふなど尻も結ばぬ糸、哀れに静まり返りし所に、甚助あわたとしく、子の甚太郎七歳になれるに、戻子の肩衣に裏附袴の大きな牌を胸高に著せ、自ら身頃に抱きて、微塵も氣の毒なる貌はなく、座敷の眞中に甚太郎を下し置き、今宵の位所に、其の弟甚七涙拭ひて進み出で、さても太い人、此方は何時勘當許されて來り給ふぞ、兄じや人死なれたとて、筋目なき事はなるまじ、我かくてあるからは、此の跡式を誰か取らん、是非欲しくば、死人と中直

りしてからの事といへば、甚助眼を見出だし、其方は知るまじ、過ぎし七日の夜、懐かに甚九郎殿來り給ひ、今までの勘當は、公儀へ訴へたるにも非ず、然れども一端町の宿老へ斷りたれば、十年のうちには、表向行來なき分にもてなせ、若し明日が日死んでも子はなし、甚太郎は甥なれば、己が跡を遺るべしと、頭無で丸方々の約束、左右なきとて兄親方に理屈だて、はつ敦賀に賣られ、筒蓑米拾ひし事を忘れたかと、延上りて氣色するを、女房此の有様を見て、奥に走り込み、衣類手道具何やかや、心に掛かる欲しい物、どさくさ紛れに取集め、煙入の時の長持に押込み、錠いんとおろして何の氣もない貌して、姑の見る前にて、髪くるくると束ねて切りかくるを、老母押止め、其方が心底尤もなれども、いまだ若き身なれば我れ分別あり、待ち給へといふを振放し、最早私の髪のある御分別は、ふつ／＼嫌で御座りますと、無理に鉄み切つて投出だす。甚助甚七は互に大聲上げて、面を張合ふばかりに立騒ぐを、同行中取押へ、先づ静まり給へ、此の穿鑿は跡にてもなる事、死人にも手をかけず、野送の衆も宵から詰掛けて、聞かると外聞も宜しからずと、老母諸共宥めけれども、甚助是を聞入れず、何の六ヶしき事はなし、今宵の位牌を誰なりとも、指でも指したる者は相手に致すと、脇差捻り廻す。甚七は成程己が持つて見せんと問答果てざるに、同行も扱ひ草臥れ、兎角我々は日比の好みに、沐浴をして仕舞ふべしと昇出だし、頭に湯を一杓かけると、伝といふ聲と共に息出で、やれ蘇生りたるはと水を口に注ぐと、甚九郎目を開き、さても氣がつきたやら、永々としたる夢見たりと、前後見廻せば、大勢立騒ぐ。是は何事かと段々聞きて肝を潰し、先づ其の甚助めは何處に居るといふ聲に驚き、はや憐りの顯るゝかと、甚

太郎を倒し抱きて逃出でける。さて腰を探りて見れば、金藏の鑰なし。是は誰が取りたるといへば、甚七私を取りて置きたると懐より出だすに、汝誠志あらば、母には何として渡さざるぞ、其の心底より此の愁へを願みず、跡式の欲論せし悪人の、向後勘當と扣出たせば、諛る道理に責められ、一言の返答もなく立出づる。次に掛視は誰か直せしといふに、老母を始知りたス者なし。よし／＼燐火を握らせて穿鑿すべしといふ時、女房赤面して聲を震はし、それけ私が長持にと、羨々取出だす、其の外目に立たざる例合しからぬ物の一つ／＼取出だすに、誑惑なる心底云はずして顯れ、勿論剃髪の心より、即座に髻拂ひたる様の、潔きには似合はざる仕形、さりとは水臭き心機、行末思ひ遣われぬ。是までの縁なるべしと、夫は此の世にありながら、後家姿となりて直に親里へ送られける。皆是欲心より起りて、慚愧甚だしく、熟觀すれば既に財寶、黄泉の旅の糧にならず、今より死したる心になりて、有銀三百貫日祠堂に入れて營念佛をとりたて、老母諸共後世の願、木來の都に歸る山の邊に、庵を結びて行ひすましける。

二 付け度物は命に浮桶

神風や、住吉の浦靜に禰泉の堺、爰も都めきたる柳櫻町、錦の町の夕日影西に傾き、鳴門の浪に立騒ぎに村島、雲に霞に見渡せば、蟹の磯屋の立並び、蟹が島も仄かに、淡路の繪島を舟舟、武庫山風の心よく、和田の笠松も村雨の跡思はれて、時鳥の初島なども、詠の浦、難波の三つ四つ五つ、忘貝拾ふなる手近に、細江の藪

に埋木の干潟に現れ、玉なす濱續きに一つの島あり。殊更に面白く、民家の軒は雪の明を奪ひ、松の若木のうちに僅なる宮井ありしは夷島とかや、その昔寛文八年神無月十日の夜、雨風烈しく、電扇を響かし、然も暖かなる車夏の如し。其の翌日見れば、夜のうちに此の島出現せり。又同じ霜月に、靈龜上りて萬代の例を祝ひ初めて、人家多き中にも蓬萊屋福右衛門とて、廻船數多長崎の商人の出来分限、度々利潤ありて、此の度また新艘の舟出、日次靜なるに男女取乗りて酒宴して、まづさへぎる盃に千代を重ね、住吉の松太夫は白幣を贈し舟魂をいさめ、鹽きかせの大藏坊、錫杖を振りたて、此の仕合丸上下の順風、思ふ儘にお家の榮千秋萬歳、金銀は蓬萊屋、所繁昌と敬つて、申拂ひ清め奉ると、よい事揃ひを言立てける。さて水主楫取も日出度今日の酒盛と、順の舞の藝盡し面白く、暫く簾かけし片見世に腰掛けて詠めしに、金箱に括り付けし物は何ぞと問へば、主の翁あれは浮木といひて、若し船破損の時金は重き故に沈みけるも、此の浮木を見捨てずといふに、其の時節ならば、乗る者生きん事難し、命の浮木はと問れて、金銀は世に多し、舟に積むべし、命は二つなし、歩行にて長崎へ行くべし。今の世の人心、同じ風味なる鰻魚を喰はず、危き鰻魚を喰ふ。此の島の一夜に現ず、物に始あり終あり、一夜に滅すべきものに非ずや、君子は危きに居らず、速に爰を去りて雨の橋に留るべし。

三 比丘尼に無用の長刀

行けば筑後の國、爰も假寝の一夜川を渡るや、何の夢路なるらん。高良山の邊岩根道を上んに、左の方の玉座の中に、結びて間もかき庵に、年の程二十に二三つ餘れる比丘尼の、阿彌陀經誦して、聞くに殊勝と増りさながら二上山を爰に移し、中將姫の面影思ひ出でらる。朝日さしうつりて竹の細戸より吹きしに、佛壇の片影に契地の定紋清らなる長刀一振ことがましく立てけるは、佛の利劍にも非ず、行ひすませる心とは各別なる。子細を其人に問ふべくも、勤行の障りとなれば、竊かに此の處を立去り、苔地の葛藟など踏分け里の家に入れば、主がましき野夫の裂織といへる袖の佗しく、山刀をさして眞柴手束ねて、港の方に出でて渡世すと見えて、若牛に鞍置き、童子鼻綱を携へ、破籠様の物に篠の折箸、栗飯を樂みと見えて女が門送して、仕合の歸りを待つと云ふ。其の聲の不束なるも、彼の男の耳には如何に聞くらん、かゝる縁に引かれて住みよかるべしと心の程思ひ遣られ、此柴男に最前の荒増を尋ねければ、我れ知貌に語りける、當國の城下に、村井彌し右衛門とて弓大將役を勤めて年久しく、其の子息源内は未だ部屋住なりしが、奥に召使、腰元蘭といへる女、色香姿形下々には殊更に勝れて可愛らしく、乳母なるものに此の下心を嘯き、大旦那の泊番の夜、お袋様の宵まどひの時、竊かに乳母か手引して、お部屋に忍ばせしより、懸渡る橋となりて、結びし水の心解け、漏らぬ契りとは知れぬ。月日は流れて早き習、明るる春になり、定め通りの出替、人知らぬ思ひを誰が柵となつて、此の別れをか止めん、程なく去年、今日に當り御暇給はりけるを、竊かに手段を廻らし、同所の町外に裏店借りて、忍びて行通ふ互の心淺からず、深く進むに餘る浮名たつて、其より親里小野村をいふ所に預け置、夜毎に行歸るは、思ひ深艸の何某より通路繁き松原、曙の鐘を聞きて辛く起別れ、鶏なき里もがたと盡しぬ契り

●ら世を恨みて、今宵も又暮るるを待ちて急ぎぬ。爰に其の比の暴徒、家中の二番生、天田新七小須萬七水橋岩右衛門、類を引く友七八人、此の松影の下道に村立ち、月薄暗夕々は、往來の律義方を止めて難殺す、此の慰み何の樂みにも代へじと呟く所に、源内何心なく通るに、人聲するより、流石路の氣色から、身を進めて行くを、此の者共見て可笑しき男の形振、仰向此方共を怖がるさうな、いざ揚げて墮して一笑ひと、一度に左右より、たひくと密累り、何の苦もなくとつて投倒せば、弓矢八幡と刀に手かけしを見て、拔せては面白からず、手をはたらかすなといふに、又六七人取掛つて、後手に縛り揚げ、大小背中に負て、杖をもつて置き立て、此の罪人急げくと、大勢後ろより難立て、時無念、直ちに消えき思、譬へ方なく、責め、彼の月に掛、雲放れ早くば、壹人なりとも面見知つて後日の遺恨晴るべきものと男泣き。此姿にて女の方へ行くも恥かし、屋敷へは納歸り難し。走なる河に身を沈むべしと思ひ極めながら、また屍の恥辱等難し。さても是非なき次第、侍冥加に盡き果たり、はあ今鳴りしは八つの鐘、逆も爰に存命へて佇し詮なしと、夢に辿る心ちして悲しくも彼の女の編戸にはこび來り、足にて音づれけるに、女は早く待ち佗び、何の刻限にも來り給はず、如何なる勤めの障りかありて、今宵は獨り丸床の用意して燈をしめし、夕に變りて物淋しく、其彼思ひやる枕に、夢も結ばず帯解かず、袖垣のそよ吹く風におどろかされて腹を立つ時、此の音に取敢へず立出で、何心なく伴ひ入れ、最早御出でなきかと存じたるにと、先づ火をたて、見れば、是は如何なる御姿と呆れ果てしに、源内差俯むき、口惜しとばかりいひて、涙をはらくと流せば、女も何かは知らず、淺ましき御有様、假

●如何なる鬼神にても、御前様を其の如く致すべき者は覺えずと涙ぐむに、段々力に及ばざる仕合せ語れば、それは是非なき所誰か見知るべき、必ず無念に思召すなど、様々諫めて纏切らばどき、終夜撫で和らげて、野寺の長朝と同じく別れて歸りける。爰に源内の從弟、鹿谷惣八といへる男、由良門之進といふ美兒と、理なく兄弟の契約したるに、或夜の雑談の次いでに、此の比澤田松原にての事承るに、源内殿の御事は御自分通れざる間なれば、我とても他に存せず、然れば聞く度に氣の盡千萬と、其の有様語るに、惣八も驚きながら、體ならざる事なれば人違ひと知らず、先に慮なる事にして、能き事聞くに似ずといひて立別れ、其の翌日源内に、若し此の敵の様子は覺えなきかと話せば、皆迄云はず、相手知れざるゆゑに、有るに甲斐なき命を今迄ながらへし、其沙汰せる者は誰なるぞ、早く聞せて給はれと、はや顔の色を遠へ、骨髄に徹して急いたる勢ひ見えけるに、惣八分別して、若し門之進に聞きしといへば、忽ち打果すに極るを、言ふべき道なりと思ひ、然らば近日穿鑿を遂げて、互に廻れぬ身なれば諸共に打果すべき覺悟なりといふに、源内立腹して、既に聞き給ひたるものを相手にする思案、穿鑿も評定も入らず、只今承らんといひ暮るを、それは聞分のなき一言、平に待て給へといば、其方け親類に似合はず、外に思代ふる方ありての事なるべし、今まで堪忍したるは、相手も見知らず、源内とも知るまじと思ひたればこそ打置きしに、語りたる者ははれずは、其方道ぬといふに、元より惣八門之進の厭ひけるより、それ程に思はれなば、如何にも引かぬといふ詞の下より抜合せ、深く差違へて果てける。門之進是を聞きて、所詮此の噂したるは我なり、又我に告げたるは岩右衛門なればと、此の仲間

へ押しつけて段々書付け、果状はたじやうつくれれば、さては顯れたりと、所も同じ松原にて立合ひ、打果して門之進かどしのしんも討たれぬ。其の鬪むまといへる女、此の事聞きて發心はつしんしての比丘尼なり。

四 鼓の色に迷ふ人

清見瀉きよみだ、心を關に止め兼ねて、未明急みよみの鐘の聲、旅宿の夢を松塞うして、風に驚く三保が崎、田子の入江に差掛り、弓手にさつと山氣疎く、哀猿叫んで物佗しく、磯邊は御群たち、猶淋しき眞砂地を行くに、鹽麩く濱の薄煙立登り、白雲富士を盗み、心當てなる狂歌の趣向も他になれり。猶行末由井神原などいへる宿に、矢矧と名に付けし目馴れぬ魚もかしく、眠覺の笠筒手に振れ、吹上の松原を過ぎ、早くも舟渡りして、浮島が原より、枯野の薄押分け、足柄の山を始めて見し事も、藜杖廓を出でしより、異なる風景に限境を悦ば、め、猶奥疎く入るに、櫛實りて山茶花色どり、葛の枯葉も秋よりは勝りて、賤しき岩尾の恥を隠しぬ。下洩る雪、自らに凍りて山の頭も翁めきたる風情ありて、岩際絶えて櫻の切株のみあらけなき能笹を分行くに、霜も諸袖を浸し、朝日顔へと影遅かりし。忽然と岩に下りぬ。池崎に響きて、微妙の鼓の音のみ、爰には不思議と聞耳たつるに程近く、此なる岩窟に正しく人やありける。紅の細ものなる羅絹の袖ほのめき、焚きしめたる黒の風を逆ひ、現心げんしんになりて村杉の葉隠れより差覗きけるに、年の程假初に見し時は、里の揚巻振分髪あやまきの程過ぎ、十三ばかりの美童の、人家離れて此の所に住む事も由なし。我を見ながら物いはず笑はず、繪にかける佛かと疑はれ、

暫く物思ひしが、過つて近く立寄り夢の心地になつて、如何なれば久しくおしけるぞと尋ねし、我其の昔は駿河の府中に酒屋長藏といへる者の娘なりしに、九歳の時母に後れ、五年経ざるうちより、繼母しきに掛りぬ。世にある習ひとはいひながら、殊更に妬み怨まれ深かりしかども、我が誠の心より晝夜に身を費し孝を盡しけるに、十三歳の春より、時の母道ならぬ心にならせ給ひ、度累れば人も見咎むる程になりしを、其と一人二人沙汰せし時、此の咎めを俄に我にねずりて、通ふものありと父に告げ知しめられしに、此の事只ならぬ曲事と糾明に逢ひし時には、最早有の儘に白狀すれば、忽ち母の悪名のみならず、襦を渡せし奴まで命を絶ちての不孝の咎通れず、所詮我一人の越度になり、一殺多性と、孝との道に叶ふと思ひ定め、猶々誤りたる通りの段々書置して、其の夜竊かに裏道より出で、此の山陰に駆入り、五日は水も吞まず、覺えし誦經念佛して、六日より倒れ伏して枕あがらず、今は最後に極めし時、不思議や異香空に薫り、口に露の注ぎ掛る覺えて、自ら息通ひ出でしより力付き、時々怪しき童子天降りて、伴ひ遊び、身體軽く、時しらぬ飲食飢えず寒からず、鬮鬮の咲くにて春を知り、粟稔の落ちたるに秋を知りて、三十年此の山に住み神通今覺えて、居ながら古里を見るに、はや母は先だち給ひて十七年になりぬれば、是を語る、天道人を殺さずとは誰がいひけん、道人稀に來り給ひて、語るも不思議なりといふも愚かなり。暫しと思ふ昔語、尋常の三日にぞありける。其の後里に出でて、又歸るさの夕、府中に假寝して、明の日主あまのに是を語れば、傾手を打つて、其の長藏といへる者、今は跡絶えて所縁なし、是は奇異の物語、道人先達して其の所見せ給へといふに、二三人伴ひて、又右の岩窟に往きて見れ

ば、彼の被羅綾の衣残りて、二度見えす。

五 椿は生木の手足

夜だに明けば、尋ねて紀州街道に出づべきに、邪見の里の情なく、獨り法師に宿借さじと、無義道なるも、誰を恨みの葛、信太の森の下影に、涙な添て時鳥、木の葉夏ながら紅葉に、枕に夢も結ばず、かゝる時こそ世の憂へを知らるれ。更け行く鐘を嵐傳へ聞けば九つ、まだ宵ながらとはいへど、辛きが爲は秋より永く、遠里に麥搗く歌を柳に嬉しく、薄くもる月の習 豹蚊いとど群りて悲し。かゝる所に怪しき姿せしもの、急がしげなる足並しどろに、只今御本社よりの御使者と八葉の車轡かし、御名代なるは、無禮するなと先走、此の森の社壇開けば、眞鍮葛の玉姫と聞えて、靜に歩み出で立向ひける時、使者車より下りて笏取直し、今般、御祭禮、御旅中御機嫌よく、今宵祠に入らせ給ひ、京中の氏子共、悦ぶ事限りなし。就いては例年の如く、諸國御流を汲む官の者に、其の功の仕方によつて官位あるべしと、子細らし冠を撫でおろし、其の爲深草丸勅使なりといふ時、皆々頭を下けてうづくれば、玉姫座をしさりて、飛殿是へと請し、御社の早介に云ひ付けて、國中に廻狀を遣せば、蟻通の歌之助を始め、暫しの内に寄り集り、皆々献上物をさし上げ、赤飯山を築き、油揚をみつぎ、酒 大和屋に念を入れ、蟲の取育まで運び、此の度の御事と上を下へと返し、酒次第に長じて是より醜盡し給まり、金能寺の彦助どの、いざ遊ばせといふ時、辭退申せばおそれあり、わたくしは里々の夜杖をこゝろぞ

す、住寺玄海と名乗りも果てず、祈禱八拜月待日待の一祈り、禱詞般若波羅密と舌の廻らぬ所はあれど、口はやに繰返し、印を結びかけ、手を打つて其のまゝの法師から、化功甚だ餘りありと一番に御免を蒙りける。次に黒装束の中納言、いはずして知られたり、雨雲の馬よかまつさかさまに落ちての何がし、蟻通の歌殿よな。三番に家原に住みて年久しきちよこ兵衛、姿は二八の花の貌、色紫の帽子をかけて、何處へ飛ぶの定めなく、しどけなき形振、満座死にますると惱みける。次に鑓箱這出でける、むかしの鐵輪は三足、是は一足も見えねど、尾の隠されぬが氣の毒、前に計りしお札にて手漣の水四郎と知られぬ。五番に水間の野老堀のぬく介、形は其のまゝ大木となり、兩手は梢のごとく時ならぬ格の花、折りに來者ぞかどわかす。次に出でしは艶姿、假令へば島原、野風大坂、萩野にも劣るまじき風俗、衣紋氣高く引きつくるひ、如何なる粹もころりとさせん其の化粧、どうもならぬと興じけるは誰ぞ、車も愚め乳守に名高き葛城が假の姿、大泉陵の墓あらしと會歸して入れば、色黒き隆高なる男、是は佐野の樽盜の門之介、次に鉄巻に釣盤、大小見ながらねだれ者、酒手くれねば通さぬ男は、助松のわぢ助と大笑ひに尻隠なく、明くれば元の林になりぬ。

懷硯 卷三

一 水浴は涙川

五十鈴川の小石を拾ひ、戀の夜に入る人の門口、葦に打付け、天の岩戸も破るゝばかりに響き渡り、伊勢の山田に旅寝せし、夢を驚かしぬる宿の主、何事ぞと尋ねしに、近所に煙入ありといへり。誠に二柱、始の男神女神の其より以來、人皆怪氣より起りて、かく磔を打つ事よと大笑ひに目を覺し、東路に下り、其後又此の宿へ通りがけに立寄りけるに、入失心たりとて鬨るまじき事とて、亭主の語りけるは、日外女房呼び一男は、中世古といふ所に、松坂屋清藏にて、身過にかしこき、世間愚なる男なりしが、常に寄合ふ諸講の宿には、彦左衛門、徳介、松右衛門、新助、師匠は武右衛門、一所に並び居て、今宵は清藏遅しといへば、彦左衛門進み出で、此、春女房持つてより、少女の用事には門にも出でず、晝も大方寝て居ると見えたり。世の中は皆あの通り過不及なる事のみにて、無男といひ、餘程足らぬ者が、今の女房など持つべしと、下手な氏神も知り給はじ。憎き事は、一昨日もちよつと見舞ひたるに、大婦白晝に炬燵に暖り、然も己が音づるゝと、二人ながら蒲團被りて俄に空癖、然連はその仕方の悪さといへば、皆々口を揃へ、法界ではなけれど、あの男めに可憐女房を持せて置くさへ腹立つに、餘り見苦しき有様、今にも來たらば云合せて、さらする談合せんといふ所へ、清藏來り、

一つ二つ世間咄の序に、松右衛門一分別ある貌して、かう話すからは互に悪しき事あらばいひて直すが道と思ふから、近比云ひ憎くけれども、此度の御内儀の事、器量は尤も人の沙汰する程の談體残る所なし、然れども今まで行かず居たるは、大分子細のある事、誰も知るまじ、持病に癩癩といふものありて、年毎の小寒の末、大寒の差入りに、必ず發りて、御手前の命を取らるべしと、鼻根に思ふ程の者は、是沙汰なりといへば、清藏肝を潰し、それは如何なる病といふに、卒爾是が發ると、先づ丸裸になりて白晝に大道に走る、常々秘す事を口走る、道具を打破る、科なき下人を打躑き、疊を切裂き、我が男の咽笛に喰ひつくと云ひ立てる時、清藏色を違へ、兩無三寶と暫しは物もいはず、さてもくは是非なき事と是を眞事と思ひ、能くこそ知らせ給へ、大寒もはや程近し、命一つ拾ひましたと直ちに宿に歸れば、跡は大笑ひして、誦は止にして夜を明しぬ。清藏は宿に歸り女房呼んで、ちと思入れあれば暇を遣るぞ、只今歸れと立ちながら三行半さらく〜と書きて投出だせば、女房涙を流して是は如何なる事を聞きてかく仰せらるゝぞ、様子聞せて給はれといふに、何程憤りやつても涙が怖い物でなしと、愛想なく引立てれば、此の悲しさ限りなく、然れども女の理なき、泣く〜里へ歸りければ親達の不思議、常々人の沙汰に逢ふ程中よき夫婦といはれて、今俄に去らるゝは定めて其方に不義あるべし、さてく憎き女めと奥の一間に立籠め、仲人七右衛門を呼びて此由語れば、是は思ひ寄りぬ事、清藏此の分別あらば私に知らず筈、先づ参りて様子承るべしと、清藏方に行けば、はや聲を上げて、七右衛門殿とも覺えぬ、彼の様なる病者を、よろこそ肝煎れしと恨み數々、其は心得ぬ不足を承、子細語り給へといへば、右の

段々追付寒に近し、何と七右衛門殿、人は嘘を吐く物では御座らぬといふに、さりとは其の様な事とは夢にも知らずと呆れて歸りぬ。月日消つは早く、寒の明日、此の女房衣裳常より改め、美々しく飾りたて、物好み模樣染蹴出し、歩みの容姿更に勝れて、見る者惱まざるはなし。老母と同道して、右懸口いひし五人の者共の家毎に見舞ひて、寒さも過ぎ行きますれども煩いも致さず風さへ引かぬ達者、お目に掛けんとい々見せ、清蔵所へも立寄りて、随分無事に暮して、此通りと云ひ捨て出づれば、清蔵手を打つて、さても人に跡刀なき事を沙汰して、馴れ染めたる中を離れさせけると思ふ上に、寄り来る程の者は、美しきお内義を何として離別なされたぞ、心立と申し結構なるお人、千人の中にも亦有るまじと、金を落したる様にいひなし、殊に此の比何處やらへ嫁らるゝ由、此の男になる者は仕合な事といふに、清蔵此の殘念胸に迫り、節季の仕迫も誰と年をとる者ぞと、萬事打捨て面白からぬ浮世、朝夕無念無念と口説み、二十七八日より髪をも結ばず、正月簪物も纏はせず、蓬萊と海老と相生の松も夫婦ありてこそと打伏しける。明くれば初春、空長閑に其彼當年の御禮者聲頻りなるも、正月早々から疝氣が起つて寝て居るといへど、起上らざる所に、子共數多大人交りの露眼はしく、水浴せしと囁きたて通るに、清蔵好もしき事と其儀証け出で格子より是を覗きてあれば、下の町の孫助ではないか、誰が娘を呼んだといへば、下人太郎介、舊多より頼みが参りて、此方の始のお内義様の、婢ござりましたと云ふに、今は堪りかね、無念至極と奥へ駈け入り、何の面白からぬ浮世に存命て詮なし、東角世に二人共なき女房を、嘔吐いて去らせし五人の者、片端から刺殺して死んで胸を噴すべしと思ひ定め、長持の袋

捻切り、脇差取出だし、髪は去年の二十日過ぎに結ひたる儘なるを亂し、先づ彦左衛門方へ駈け込めば、此の春の目出度さは、何れも若うならしやりて、五百八十七まがり、注連繩飾り幾久しくと盃事して居る所に、彦左衛門は何處に、禮に出ましたと云へば、匿れても匿させぬと、壹尺八寸ひらりと抜きて、家捜するぞと、奥から口へ走り廻りけるに、子共は恐れて逃散り、邊側の者も、是は何事が起りたる、年の始なると、戸閉して肝を潰し、彦左衛門は留守なれば、それより松右衛門所に行きて一騒ぎ、徳助へ走り行けども皆々禮に出でたス跡の間に、五人の者の家々を拔身にて駈け歩きしに、途中の禮者肝冷し、元日に此の様な事は終に例なき騒動、やれ喧嘩と狼藉者よと、飾松踏倒して逃ぐるもあり、其から諸宿武右衛門所に行けば折節居合せ、此の有様を見て驚きながら、先づ静まり給へ、如何様とも此方の存分の通り致すべしと云へば、流石師弟の挨拶ありて、暫く静まりしうちに、宿老に宥めさせて聞かぬを、且那寺の長老醫者の春徳、上下四町の年寄を掛けて扱ひて、漸く堪忍するになりて命は助け、右の五人の女房、皆々去らせ給はれといふになりて濟みぬ。其より清蔵五人の家々に行きて、荷物まで拵へ、自身其の親里親里へ送り届けらる。或は子共數多のある中、思ひも寄らぬ別れを悲み、哀れは云ふばかりなし。武右衛門女房は、今年六十一なりしを堪忍せず、馴れ染めて四十三年、今になつて去らるゝ、是は如何なる因果と嘆かれしも道理ぞかし。總じて此の類ひの悪口いふまじき事なり。



二 龍燈は夢の光

何の虹ぞ、更に今反橋渡せる夕氣色、紀の三井寺の有様、近江なる湖此處に響へて都の富士は磯と詠めり。折節の秋の風吹上に立てり、白菊數咲きて、浪に映らふ星の林の如し。是なん織姫の宿木とも傳へし布引の松千代古りて、毎年七月十日の夜、龍燈の光鮮かなる玉津島姫の姿めきたる婁子を誘ひ、貴賤遊山船に酒歌の樂み一或は琵琶の振音、樂天が鬘を撫づる瀟陽の江もよもやは是にはと、自慢の男此の所に寄りなん。沖浪騒がしく、次第に夜更け方になりて、人の心も空なれや、晴れ行く日の影を外になして、龍神の燈捧ぐるも今なるべし。見ての語句にもやと、群集の輩、詠に汐風を厭はず、詠に首の骨も弛怠なりける。昔より所の人の云ひ傳へしは、此光を見る事人の中にも稀なり、隨分の後生願ひ人事をいはず腹たてず、生佛様といはるゝ程の者が、仕合よければちらと拜み奉ると聞きし所に、大勢立重なりて居るを、我慢に突退け推退けて出でし男、眞向に進み、珠數の緒の長きに咄半分繰離せながら、各あれ見給はぬか、今あがらせ給ふはと、目を眠り頭をうなだれしに、十人のうち七八人は磯に釣火するを見付け、有難し、日比人悪かれと思はぬ證據、今願れたりと、貌整めて拜み、又二三人は罪が深いやら何程延び上りても見えぬと、頭掻く程の者は眞實なるべし。道人はとても及びなしと、觀音堂に通夜せんと、初めは普門品讀誦などしながら一切眠るうちに、其の曉の空に紫の雲懸き、海上風絶えて浪間に金色の光、水玉湧返り微妙の調耳に響き、不思議やと見る所に、鬘つち結の童子數十

人、瑠璃燈を捧げ、跡に無量の鳥甲と見えしは、田螺地ひんとしたるが、魚の尾鰭冠して、管絃を奏し、此の松に掛け奉り、各海の上に跪き給ひ、此方を伏拜むと、御厨子自ら開かせられ、持ち給ふ一莖の蓮華をあけて、善哉々々、麟共と、三度點頭かせ給ひて、又戸帳に隠れさせらるゝと、皆波間に入ると、枕の鐘と夢が覺むると、一度にて感涙肝に銘し、宵の後生願をかし。

三 氣色の森の倒石塔

杖扶暫し留る大隅の片里に涼しき暮を待ちて、澤邊を行く細石水に夏なき心地のして、更に都を思ふ糸を爰に梢の茂み、さながら其の氣色の森に、郭公の折節を知せ、機なる村雨も旅の習とて轉く、漸々に辿り來て、近付にはあらぬ方に子細を語つて、一夜の假寝に夢見る隙もなかりき。人の姿は歸もさのみに替らず、明日は五月の五日とて、松火あかして、跡上なる月代を刺ると、老人は肩衣かけて、持佛に勤めなす有様、東門徒の名號いと殊勝に拜まれける。女は柏の葉にて黒米の餅などを包みけるは、是なん上方に見し眞鹿の粽の代りなるべし。釣鍋に小さき離を仕かけ、葉茶を煎じて、伊勢茶碗の手厚きに汲みなし、我を饗應しける。何處にも鬼はなき、君が代の道の廣きを今見る事、却りて咄の種ともならんかし。明る曙急ぐ草鞋がけ、脚絆のしゝ干になるまで圍爐裏の縁に掛けて、取雑せての咄聞くらちに、隣に人聲の喧しく、まだ盛りならざる女の叫びけるは、如何なる事と尋ねしに、主の語る。彼は過ぎし比まで、此國のお屋敷方に、和田太郎七とかやいへる御内

に、十一二歳より四五年奥に召仕はれて不便がられしに、俄に物狂はしくなりて堪らざりけるより、此の比送られて歸りしを、両親是を嘆き、一人の娘を生ながら地獄に落す心して、力に及ぶ程醫療祈禱に暇なく加持すれども氣色靜まらず、是より十七里を経て、名譽の道人ありけるを呼越し、餘りに強く祈られ、自ら本性を願して、我は此女と朋輩にて、化けて隱居の御袋様に可愛がられ、朝夕御食まるる膳の向に前足折つて、御口元に目をつけず嗜み居るに、御心つかせられ、鯛の肝残しを賤らず、虎よ虎よと頭撫でながら下され、膠物さへあれば、何處の屋根の上、藏の隅に居眠りして居るにも、呼び給ひし御心入嬉しかりき。或時御娘子御平産ありし御見舞の留守には、我獨り淋しき襖の中に立籠められ、一日一夜御寢卷の上に眠り、御歸りを待つに遅く、はや腹に力なく、それより臺所へ出でて見るに、いつもの鮎貝には乾飯の如くなりてあるを誰あつて心を付ける者もなく、餘りの事に膳棚にかゝり匂を尋ぬる所に、小さき青皿に、飛魚半を喰さして有りしを、手にて徐と掻出だすを、此の女走り來り、夕食に添へんと思つて置いたるものと、釘に懸けたる摺小木を以て肝心の鼻柱を健に喰され、絶入する所を攫んで放られ忽ち眼眩み、三度舞ふまでは叶はず、息断えける時の一念何處へか行かん、さて亡骸をば竊かに溝の側に埋められ、闇より嗜き畜生道の輪回を放れず、其の時隱居様へは、行方知らずと詐りし恨、生半かくなる事を聞せ給はゞ、跡をも弔ひ給はらんものと、さめんと嘆きぬ。聞く者了簡して尤もの事に思ひ、然らば如何様にして退くべきぞといへば、我に別に望なし、一生暖かなる事を知らず、夏多時を分たず巨燵して此の家の内に置き給はれ、さて朔日、十五日、節句晦日には、鯉節天蓼を樽

の上へ備へ給はゞ、只今速かに退くべしといふ時、そは安き事、成程心得たりといへば、嬉しき笑を含み、悦ばしき聲、嗟々といふと、氣色靜まりぬ。今に至つて其家に、不斷巨燵して置かねば樂りける。或時病人又口走あり、我は同じ屋敷の與九郎といへるもの、此女に度々執心、掻口説きて遣はしけるに、辛からば只一筋に辛からで、情混の偽を誠と思ひ、年の二年心を碎き、人目の關の明暮忘るゝ時なく、今は時節悪しく、今宵は勤めに際なしと、根から否とも色には出ださず、それをば神ならぬ身の白糸の、夜は焦れ晝は燃え、胸の煙に立迷ひ、富士はおもひの磯、涙に浮身の沈むに極りし時、すでに命の絶え行く水の瀬、一夜止めてと音づれたるにも、情なくいなせの捨言葉もなく、食事自らに止みて是を思ひ死、誰か此の憂きを問はん、今は恨みの一言いふべき頼りもなく、魂は大關寺の暮にも留らず、冥途にも往かず、一念此女の影の形に添うて片時も放れず、幸ひに此度の妖怪の縁に引かれて、憤を願す。只恨めしきは、空しく果てし後それとも思ひ出だしもせられず、今は取殺して苦患に沈むとも叫責に逢ふとも、共に黄泉の旅の假枕、一度は此の思ひを晴すべしといふ聲、始に替りて、荒なる男の五音、段々理を責めて物語り、聞くに哀れを催せり。時に祈禱せし僧、隨求光明大悲咒を繰返し、此後は勝をも弔ひ、又は此の女に出家をさせ、永き未來一蓮托生の契りを祈らすべしといふに、和尚の教化骨髓に徹したりと發起菩提の心を願して臥しぬ。其の後病氣右の如く本腹して此の事を問ふに、覺えありと云ひしに、死靈の有様を語りて、比丘尼となし、深世を忘水、清き心の花をたて香を焚き、人は煙の程と消えし心根思ひしられ、其の身堅く動めて苔の衣を露に絞り、今は煩惱却つて善根になり

ぬ。然れども其の驗には、此の比丘尼壽所へ參る度毎に、石塔倒るゝ事の不思議や。一念五百生懸念無量劫、誠なるかな。我が此の所に夏の比一宿して、西海残らず巡り、同じ年の雪の山見し時、再び此に來つて此の女の物語を聞く。世にはかゝる例もあるものかはと、彼の石塔の元に行き、見ぬ其の人の跡を弔ひて歸りぬ。今は倒石塔とて名は大關寺の庭の叢に残れり。

四 枕は残る曙の縁

奈良坂や、露時雨のみにして、兒の手拍の色付き、雲霧の二面に渦巻き、鯉の形せる山も更なり、春日の里三條通りに軒の松年古りて、昔宗親と、へる小銀治の住みける邊に、纏なる煙今も立て、板屋かすかなる所に、知邊の人ありて尋ねて一夜を明し、枕に行燈の形映りて、飛火野の秋の風、尾花が袖の淋しさを、旅の習ひと思へばなり。漸々三笠山に朝日の出でしより、乾井の水を結びて目を覺すなど、朝きよめの宮廻り、心ざして詣でけるに、櫻相村の奥深く、殊勝さの外より勝り、白張の袂を譲へし、烏帽子可笑氣なる様したる八百八彌宜の貌付皆かはりて、世の中の廣き事のみ思はれ、我が近付は都に見たる、爰も紅葉の洞とて幣取敢ず神前類づき、後にまはれば、八重櫻の春思ひつる、三月堂二月堂にあがりて、抑も此の觀音は、孝謙天皇天平勝寶四年御草創あり、寶字四年二月十五日より始めて行はれける。今に松火の奇特燈心燃えざる事を怪しき。其の外不思議の多き事いふに暇あらず。殊更本堂に籠り七日の斷食する輩、願成就せざるといふ事なし。嗟

二佛中間の利益は此の菩薩に止らせ給ひぬると、魂に銘して有難く法施奉り、歸るさの兩堂を拜めば、役僧集りて物語するを聞けば、昨日の事、一人は三條通り晒屋傳十郎とて角前髪、器量人に秀で並びなき美男、深く祈誓かけて此堂に籠る子細は、手具の白銀屋喜平次娘おさんとて姿も見苦しからず、十人は七八人も好く程の生付なるが、此の傳十郎と懐深く、數通播口説きて遣しぬるに、如何なる因果か、其の嫌なる事、胸に支へて物も喰はれず、随分無義道に返事すれども、此女中々にも思ひ切らず、哀れ大慈大悲の御影にて、彼女のふつゝ思ひ切る様にと願ひをかけて、東の片隅に掟なれば、紙帳釣りて籠りぬ。又西の方は花園町、墨屋外記娘おしな、美形此の所に沙汰ある程の器量、心を掛けぬはなかりき。或時酒屋門十郎といへる風流男に見初められ、見るから好かぬ風な厚髪と思ひしに、出入る比丘尼を頼みて、是も思ひの數書き綴り、今は千束に餘れども、身の毛彌立ちて疎しく、假令流の女となるとても、彼の男とは嫌なるに、しつこく文をこすを手にさへ取らねと思ひ止まず、逆も詮なき事に、仇名立ちては由なや、重ねては又見るに及ばず返せど、彌増の戀草露の命の有らん限りはと、云ひ來したるが病となり、同じく此の男に思ひ切らせたび給へと、紙帳の中に斷食して、兩人の願ひ微塵も違はざる事不思議や。七日のうち願ひ成就せざれば爲飢き苦み堪へ難く、叶へば五體草臥れざる由云ひ傳へし。さる程に此二人の者、晝夜普門品を百卷づつ繰返し、信心強盛に祈りをかけし一念、豈空しからんや。既に七日満する曉の雲の光、音楽空に聞え、内陣より白髮なる老翁、手に水晶の百八丸、蓮華に持添へながら枕にたゝせ給ひ、兩人の者に告げさせ給ふは、汝等が願ふ所、あまり底心から丹精を抽ずる

故に納受するなり、其の證據として是を取らするぞ、思ふまゝなる事せよと、天竺絨の長枕を給はると見て、夢は夢にて覺め、枕は、眞の枕二つの紙帳の間にあり。是は有難しと門十郎、急ぎ這出で取らんとすれば、おしな是を見て、其處へ男は狼藉をする、其は此方に願ひ有つて觀音様から貰ひましたと引取るを、門十郎こちも御夢想蒙りての事、斷食して力はなけれど、此方の力に劣らんやと、引合ひければ、おしな涙を流し隠たて、悲しや大事の物を遣るぞ、思ふまゝなる事せよと仰せられた此枕を、人に取らるゝ事の口惜しやといふに、寺僧駆け付け、是は何事と段段聞いて、既に二人の心に嫌な物は、願ひの如く止むべし、其の上に此の枕一つ、を二人に下さるゝから、並べて寝よとの御媒介、しかも年比もよい夫婦、さあ各の分別次第といへば、互に劣らぬ美男美女、此の詞に氣を付け、目を見合せて、離れぬ夫妻となりける。

五 誰かは住みし荒屋敷

爰は下總の須賀山、昔は如何なる人か住みけん、四丁ばかりの石垣半崩れ掛り、茅花交りの葦原に器の欠のみにして、物の哀れも折からこそ勝れ、化して路傍の土となり、年々春艸生ずと、云へるも、眼前の境界ぞかし。側らに草の庵の鬱きに、八十路に二つ三つ足らぬ翁の、襦袢を作りて世を渡る營みと見えて、膝の下に石火鉢、古絨の火籠僅に燻をたて、絞煙草を樂むより外に、自ら求め少なきは、自然と聖賢の似物なるべし。立寄りて上總への道筋を次々に、是なる屋敷は、如何なる古き跡なると問へば語りぬ。昔此の所に高塚沖進とて、

代々爰を領し給ひ、御家の繁昌に時を得て、隣國の太守の娘を嫁りけるに、此處或る夕より氣色例ならず、床に起き臥し憐みて今際の時、御念佛を進めて、久しく垢つきたる蒲團を取代ゆるに、お乳姥御枕の下より、物書け杉原一枚取出たすと、呆れし貌して、其の儘懷に押入れ、側に行きてよく見れば、二十一二歳の女の姿を書きて、四十四の骨々に明ともなく針を立並べ、さも凄まじき調伏の形、身の毛剥立ちて怖ろしく、其の著物の色下に黄無垢白無垢の衣紋、上には芥子鹿の子の少し古びて、菊流の模染の帯の寄金、貌立目元の上臑に黒子のあるまで、あり／＼と書きたるは、其の儘奥様の生寫、思へば此の度の御病、是は如何なる者の仕業ならん、さても悲しき憂目見る事よ、幼少時より今まで育て奉りて、御心も人に誘れさせ給ふに、淺ましき此有様、穿鑿せでは堪忍なり難しと、竊かに沖之進に語れば、それは憎き仕方、糺明の仕様ありと云ふうちに、奥様の御氣色替り給ひて、立騒ぐうちに息引取らせられ、二十一歳、惜む人は必ず死する習ひ、嘆きて返らず、野邊の烟とはなしぬ。此の事七日経つと詮議するに、先づ御寢所に相詰めたる者ならで、お枕下には置かぬ筈なれば、腰元のゑん、お梳のもの、禿共は除きて、此兩人の内なるべしと、竊かに一間に呼び寄せ、斯様の事他所よりする業に非ず、極つて二人の中、紛なし、子細早く白状せずんば、あらゆる責にかけても、云はせねば置かぬと云へども、元より此者共其の覺え無ければ、口を揃へて是は勿體なき御意を蒙る、身に更々覺えなければ假令如何様の責に逢ふとも申すべき事なし。常々奥様の御心和かにまし／＼、細かに御氣つからせられし御恩の報じ難なく、御果て遊ばしてより、只今の悲しさこそ一方ならね、却つて思ひ寄せらざる御

改め如何なる因果と、涙を流し膝を揚げて泣出だすを、何程に陳しても、己奴を其の儘置くべきかと、逆も和なるうちには云ふまじき氣色に見えたり、責めよと下知をなし、大裏の椋の木に縊りつけ、寒き嵐に脚布ばかり、三日の間水も吞せず、随分術なき責を巧みて、是を思ひ知れと、内股より初めて針を差込みける此の辛さ、見ぬ後の世の劔の山か、生半命の早く消えんものと涙に辱れて、死する事は定業なるべきが、如何なる悪事を工みて、此の如く殺さるゝと、只人の心底に嘲られん事の、口惜しさと云へば、まだ責の輕くやあらんと、堀の深く湛へし所に、足に石を括り付けて追込々、首ばかり出ださせ置きける。比は十二月二十二日、殊更其の近年稀なる寒じ様、雪は降らずして竹の破るる音、晝夜止まず。彼の山蔭の溜氷りて、音絶ゆるばかりなるに、二人は水の中に一日一夜は息の通ふ程念佛して、五日目の暮に兩人膝を上げ、科なき事に一命をとり、主なればとて非道は立つまじ、此の一念終に思ひ知すべし、無念や口惜じやと罵りながら、其の堀水の泡と消えぬ。此の女の兄弟はあれど、主命力無く、過ぎぬる月日、沖之進今は召使ひの下女、數多用なければ、皆々御暇給はる内に、物籠のゆたは、御病中より其の身も病ひ、程經て里に歸りしが、隙遣さるゝに付き、著替ども取りに來り、私が大事の針が見えませぬ、お乳の人詮議し給はれといへば、針程の物が、何と穿鑿がなる物ぞといふに、それは百五十里彼方、京の住屋伊豫が上磨、男なれば刀脇差と同じ我が針といふに、尤もなり、何に刺して置いたるぞと問へば、それは隠れもない、奥様の御病ひ前に下されたる衣装繪の雛形に、然も七本さしてといふに、お乳はつと思ひ當り、彼の咒詛ひたる繪を出だして、是かといへば、成程これくと悦びて歸りき。さては責め殺せし女には科なかりし物をと、云ひて返らぬ非道、其年經たずしてお乳頓死をし、沖之進は其の翌年、怖ろしや氷の劔其の身を通すと叫び死して消え、跡は散々に潰れて、財寶春の雪の如く、崩し出づる草原となれり。是を思へば憐ならざる事に人を疑ひ、鼻の先なる女の心より、針を捧に取りなせし業なり。今に其の屋敷残りて、雨の夜や月ふる日には、化したる姿見ゆるよし、拔苦與樂の資糧にもと、法華經の提婆品讀みて通りぬ。

懷硯 卷四

一 大盗人入相の鐘

山寺は物の不自由なる事こそ多けれ、饑有りながら豆腐菰蕪買も絶えて、酢醬油にさへ事を欠くのみ。爰に越後の國立山の邊に、樹梅庵とて、常は人の通ひも稀々なる草の戸の明暮、吐雲といへる獨法師、萬づ異風紙衣の襟をも折らず、清貧自らの樂みと爲して世塵を食らず、朝に一飯あれば夕には白湯喫るに新なく、或時其の麓の里より志あるよしして、齋料調菜を送りて施を行ひたる其の明の夕、隣國暴れし夜盜六人、此の庵に押入りて見るに、人ひとりもなければ、此の屋には主はなきかと評判する時、吐雲古き皮籠の内より、誰なるぞ騒がしや、餘り寒さに爰に風を防ぎて居るといへば、皆々是聞きて、此の生活を仕始りてから、寢道具一つなき貧家には入りたる事なし、せめて湯なりとも沸して呑むべしと無興すれば、吐雲萬福の中より、湯より酒が其處々々の棚の隅にあり、燭をしられたらば已も一つ相伴すべしと云ふに、さては氣の通りたる主と打寛らぎて、終夜佛事の残り賞賑して、四方山の雜談になり、此の酒たゞ呑む可きに非ず、懺悔して後生にすべしと、上座の男より語りけるは、我其昔は出羽の國秋田の城下に梅倉總介とて、氏系圖家中に肩を比ぶる者なかりしに、功なくして藤を不足に思ひ、十一年虚病を構へ、一年に一度の禮にも上らず、比は柳咲く山蔭に、女房子共

伴ひ、京を心に慰み、花見て歸る夕暮、乗物釣らせて運びける所に、國の家老の徒若黨五六人、酒饜饜とは見えながら、此の女交りなる中に戯れかゝり、無作法數々なるを見兼ね、さきに進む大男奴を切倒せば、残る五人抜合せたるを、又三人討つて捨て、此由奉行所へ訴へしに、先け手柄とはめられ、自らこと仕りたり、今の世には軍なし、是を武邊と自慢心なる所へ、家老中よりの使者として、只今登城すべしとの事、さては褒美の仰付けられか、知行加増かと悦びて城にあがれば、遠騎兵庫之介出立でて、此度の手柄甲すばかりなし、さて殿に仰出ださるゝは、數年の病氣に似合はざる達者、偽りなくして偽りあるに似たり、直ちに改易に仰付けらるゝと、云ひ渡さるゝに力落ちて、此の面目なき忘れられず、其より縁類の方へも往きて詞なく、却つて過を語る事の恥かしさに、野に臥し山に夢見て、命情なきに糧は貯へず、昔の義埋外聞も入らず、襪ひ歩くらちに、野邊の送りの枕飯といふ物をちよつと盜み初めて、今は其に成固りしと語りぬ。今一人は關東の學寮に十四歳より師の坊の前を走り出でて、托鉢に飯料を求めて七年の勤學、所化數多の中に秀でたりと人も沙汰し、後には何れの本寺の和尚に座り給ふべしと、云はれける夕の窓の下に意魂しを靈に移して、繰返す夜はほのぼのと、明窓に走りし反故を見れば、微かに假名文の外れ、其の水壺の流れに消ゆる思ひ、命とる程に書き綴りたるは、馴れし中々の契り、誓ひして替らじと見えしは、彌宜町に置れなき玉川の何某と、其末は消えながら、是に心浮れ初め、何とやら面白き其の謀の慕はれ、假初に通ひ馴れ、度重なるに色に染み易く、花紫の一本に、學問心に乗らず、資縁少しなるに、書物買はず是に打入れ、隣七條借りて二度返さず、代りなして首尾

を調べ、生付如在なくて大等者のいはれ、法中に嘲られ、學寮に付ならず、つゝ帷子一卷にふきあげての上、悪名發と立ち追放せられ、此處も寄せられず彼處も塞がり、漸く法券の僧の寺持てるを幸ひに尋ね行き、無理に騙込み、祠堂銀を放して夜脱して次第に功積り、今は斯の如くなり下りぬ。又一人は伊賀の國久村の右衛門太郎とて、田島五町作徳大分なりしも、皆濟時には横に寝て、幾度か水牢に打込まれ、未進首丈にも驚かず、此の誑惑天に通じけん、一歳の洪水に、榮えの秋の頼みし五月の末に、有丈の早苗田を一つも残らず流され、其の荒田買手さへなく、雜穀すこし山島に作り置きたるも、又早に青葉多枯の如くにしなされけるにも、人夫雇ふべき力もなく、他所には水を取つて、耕作忽ち生返りぬる羨ましく、此の時分別の仕始に我が物いらすに只取る事思ひ付き、隣の島に水一杯港へしを、夜の内に腰を切落し自と崩れ、やうに拵へ置けば、人の手漏となしぬ。是よりよき工夫出来たりと、此の類の事幾つか積れば、人皆氣を付けて、所を追拂はれて此の體なりと。今一人は、飛騨の國草鹿大明神の神主八封は一つと知らねど、一生人の身の上の善悪、よい加減に賭つき、相神主の與五太夫が目を開して賽錢を皆此方へ到遣り、昔より二軒の社家なりしを、難なく一軒を潰して我獨りに司りし心より、横道數積れば、庄屋が利發に理を責められ、丸裸にて所を追出されたる爲の果、今烏帽子といふ名字は此の因縁なり。我は又大坂の大湊に匿れなき木屋小八兵衛問屋の第一なりしに、かけ木の千斤のおもりを試し、重に取りかへ、此の重みの違ひ數大分の事なれば、利徳存じの外に取込み、假長者となりし事、一旦の依怙は終に天道の罰を蒙り、二年の内に人知れず、滅多々々となりて、塵も残らず手を打拂

ひ、家屋敷紙袋まで遣りて、まだ不足銀一貫三百九十七匁五分二厘、扱ひにしても聞かず、命ばかり我が物にして、其の夜に近江の徒弟を頼みに行けば、はや死にし跡なるを、強請り掛つて纏二三十目拗取り、是より此の道思ひ付いて此程に修行したりといへば、某は京三條通の西、白紙屋彦九郎とて、ト手、名を得たりしに、烏丸大隅屋道閑老、其の身け隠居しながら、自然の時の金子壹兩、枕宮に仕込み、其外家も孫の太郎吉とらゝ管なる時、此の太郎吉假初にひよつと島原へ通ひ、若氣跡同知らず使ひ出し、彼の枕宮をねらはれしかども、錠を開く事叶はざるを、我に談合ありしに依つて、心元なかりしより生受せしに、即座壹歩十を手付とて給はる。是我に任せ給へと、其の寸法大方合點仕りたりと、七つ八つ輪をうちて遣れば、其の内に丁度合ひたるがありて、其の後は相論打屋と看板を出しけるに、あらゆる夜盜共忍びくゝに頼みに来るまでもなく壹歩づつに極め、程なく金子溜りて家をも買ふべきと思ひし時、捕へられし盜賊ありて、相論の打手穿鑿にさされ、雌色共附届するうちに、裏の路次より抜けて迷ひ初めて是と、大笑ひになりて、此の物語も高主の心に絆されて心安く仕る、是はお御燈と銀包みて差出せば、吐雲腹立して、怒人の物佛は受け給はずと突返せば、猶殊勝がりて、巾著の底覗ひて、皆錢箱に無理に押込みて歸りぬ。今もかゝる無慾の道心者あるものか、誠に心け善惡二つの入物そかし。

二 憂目を見する竹の世の中

浮世の日を見果てぬる岩見の國、人丸塚の邊に近き在所に、左近兵衛といへる男の、軒は萬靈の茂みに、疎の
 恥を匿し、朝食の烟絶えなくなるにも、破鍋鐵蓋、似合しき女房を求めけるに、一人の老母に不孝に當るとて
 離別し、自ら晝夜孝を盡しぬ。天より是を憐み給ふにや、七八年のうちに七八十兩の分限、其の所には珍し。
 比は五月半、枕蚊帳瀧扇手細工など拵へ、八九里傍の村里に賣りに行き、留守の中をば隣なる律義男を頼み、
 今宵は歸るまじといひて出で、其の明の日に成りても、此の扉開かざる不思議と訪れて、老母くと呼べども
 返事なく、さてもよく寝入り給ふと其のまま置けば、はや七つ下りになる。是は心得ぬ事と戸押開けて見れば、
 老母朱になつて其の邊は血流れて息もはや絶えたり。南無三寶といふ處へ左近の歸りて、此有様に肝を潰し
 て、思案に落ちざる事、誰か意趣を含みて殺すべきとも覺えず、左近兵衛急度推量するに、金あるといふ事、
 此の隣の者知る故、母を殺して取るべき分別と思ひ定め、此の事外より偽るべきに非ず、親の敵は其方と、何の
 苦もなく打殺し、此段々名主斷り、代官詮議して、檢視來りて改むる時、血は夥しく流れて疵體かならずと改
 むれば、其の後に大敷ありしが、折からの根ざし、寢間の下より生へぬきたる精にて、老母の心元刺通したるに
 ぞありける。さては彼の男を故なく殺しぬる科遣れずと、其より左近兵衛を成敗して相濟みける。是を思ふに、
 見届けざる事は言ふまじきなり、世に不思議なる事は此の類に限るべからず。されど見慣れぬ物には必ず驚く
 習ひ、鳥の空を飛び、蛇は足なくてよく行き、一つの玉より水火の出づるも、今まで人の見ざる事ならば幾程
 が疑ふべし。苟人の命を取るといふ事もはや珍らしからず。



三 文字すわる松江の鱧

神無月の朔日の日、出雲の國八重垣の、宮居に詣でけるに海邊浪高く、松に嵐響て殊更に神閑、社僧神主の外、民家の門を閉ちて、昔よりの教を守り、萬づの鳴を鎮めける。誠に日本の諸神、此の神社に集り給ひて、男女の縁を結び給ふといへり。其の二柱を立出で、側なる杉原の茂き一里に入りしに、四阿屋造の蘆葺の庵に、八十餘歳の法師、眞言律を行ひすまし、いと殊勝に住みなされけるに、自ら生垣を破り、或は片板戸押倒して、南面の縁側西の鄰、人皆立擧り物見る氣色、如何なる事ならんと、我も其の人並に立覗けば、未だ脇塞きて聞のなき女の、烏羽玉の黒髪を自ら鉄にして、散り行く柳の氣疎く、可惜花の春を待たずや。こは如何なる事と尋ねしに、上総りんと作りたる男の語りけるは、此里の傍らに、拾拵丸之介といへる浪人ありしに、所作すべき業なく、貯へし物皆になし、人知れぬ藥を賣りしに、家中の運葉女、いたづらに姪めるを護す名譽を得、元手繰なるに、舊代に金銀多く取りて渡世とする内に、一人の娘を儲けぬ。成人するに従ひ器量人に勝れ、十四歳の時、似合しき所ありて祝言事濟みける、其の翌日暇の状をもつて歸りぬ。又其の秋幸ひの取結びありて千秋樂と謠ひ、烏龜の松に千代かけて、盃の浪は越すとも祝ひたるも、其夜の明るるを待ち兼ねて里に送られけり。漸く四五五年の内に、五ヶ所去られて歸るは、まだ縁の來らざるものと悔へし。明の春は疫病流行、丸之介夫婦相果てしより、此の娘は姨なる元に二歳暮す時、隣りに身體よろしき好色男に、若右衛門といへるが

一目見て美形に打込み、貰ひかけしに、今の世は偽りにては立たず、再々埋入りし事有様に語るに、假令千所へ行きたりとて、其には少しも構はずと、服心なかりし上に、相性八卦残る所なく吟味して、逢うたり叶うたりと悦びて遣せし。祝言目出度とり行ひ、相手は替る新枕、其の身には夢にも知らざらん所に、何處ともなく此の女の前後より、胞衣被りたる赤子數百人、總身に緊と取りつき、水泳ぐ眞似して、立並ひたるを見るより、身の毛竊立ち、覺めて夢も結ばず、次の一間に終夜所作くりて、何心なく氣縮まり、此の男是よ其の所に隠れなき後生願ひになりぬ。今思ひ當れば、度々去られしも、此の有様を見られたるにぞありぬらん。さて其の明の朝、姨の方へ送らせける。是は如何なる因果、最早縁の道は思ひ絶えたりと悲み、自身に覺えなく、人の所思餘り心憂さに病となり、物狂はしく、然れど此事を忘れず、大社御神前にて、其の所謂を告げしらしめ給へと祈りけるに、夢の中に語らせ給ふは、汝が親のなせる罪の酬い來ての寢姿の有様を、詳しく教へ給ふに有難く、發心して跡申ふべしと、歸るさの松江を通れば、怪魚あがりたりとて、人立數多なるを見れば、鱧に文字据わりたり、丸み内に拾拵と、さては親の靈に紛ひなし淺ましと、流溜頂を執り行ひ、感後生の營みして、彼是の菩提を祈らんと、此の老僧に頼みて剃髮するにて侍ると、語りけるを聞くに哀れ増しぬ。

四 人眞似は猿の行水

心猿飛んで五慾の枝に移り、風は無常を告る鐘が崎、筑前の國の浦里を過ぎて、遙なる山添の野をわけて行く

に、煙は愁の種なる三味を見しに、多くは少年の塚、其の中に新しき塔婆を削りなして折節の花菊を手折り、前なる竹の筒に水をむすび、子細有り氣に竹垣の有様、是なん猿塚と記せり。如何さま様子あるべき事と、其なる一つ庵に立寄り尋ねけるに、隠坊此事を語りけるに、當國太宰府の町に、白坂徳右衛門とて沙汰ある分限、殊更息女お關美形亦比なく、今年十に六つ七つ餘り、名は國に香しく、見ぬ戀に沈みぬ。爰に隣町桑盛次郎右衛門とて、色好みなる男深く是に懷み、何時ぞの比より人知れぬ契り、人目の關も通ひ慣れては、咎めぬ方もあるぞかし。されども互の親たる者は、思ひがけなく、最早年の盛り、縁付遅き事を氣の毒がる折ふし、出入の男を頼みて常長の祝言を結ぶべしと贈交せける、殊に此方は酒屋彼方は質屋、幸ひの事願うても又なしと、仲人口を以つて手に取るやうに勧めたるに、徳右衛門合點しながら、宗旨を問へば、次郎右衛門法華宗にあらず、其なれば如何程金銀ありても、男振にもかまはず、ならぬと云ひ切るこそ笑止なれ。此由次郎右衛門に語れば、世の中とは裏表に、己が宗旨を替るばかりと、俄に妙法寺を頼みて、總の長き珠數に持ちかへて、是を又徳右衛門が方へ、彼男遣して次郎右衛門殿今朝御經頂かれ、改宗なされたといへば、徳右衛門、いや／＼根ぬきの法華でなければ信心薄し、はや此方に心當りありて約束して置いたり、手短かいひたるを、次郎右衛門に傳へけるに肝を潰し、さては我が思ひは空しうなりけるよ、此の事お關に知らせての相談かと、文細々と書き口説き遣れば、露も知らず、如何なる所へか遣られて、憂き思ひをすべし、中々君ならではと誓ひし妹背を、親の合點なければとて、なるまじきものには非ず、若しわきへ參る事儘かに定まりなば、此方よりさう致

し申さんと、返事したる明日、徳右衛門前に呼びて、本町紙屋彦作方へ縁邊極めしと云ひ付けられしに、胸迫りけれども流石色には出ださず、何となく受けて急ぎ部屋に立入り、内々の首尾俄に調ひ申す由、然らば今宵の内何方へも忍び出でたき思ひの數々書きて、竊かに送りければ、次郎右衛門此の支度して、裏門に待ちあはせて、夜半に連立ち出で、夜の中に七里歩み、明日の八つ時分に、此の里に縁邊きを頼み、才覺の路銀にてちひさき庵を結び、辛き憂住居の中は、古里忍び出でし時、此の娘日比可愛がりし猿ありけるが、夜の事なりしに、跡より慕ひ來るを、道一里餘り過ぎて見付け、さても畜生ながら此の心入、不便さに伴ひ來り、ありしにかはる賤の手業は、戀より起りて此の日蔭に身を縮め、襦を窺し、次郎右衛門は煙草を刻めば、お關は木綿の柳といふ物を繰りて渡世とするも、二人かく割なき語らひと思へばこそ一日も暮さるれ、淺ましき有様。此の猿も過ぎ一時寵愛せられしこと忘れず、氣の毒なる貌して、それ／＼にあたり近き山に行きて、薪など柏の枯枝、松の落葉掻集めて來り、茶の下を燃し、二人に給仕する體、をかき中にも可憐しく、夜は疋齋所を打捻り、朝夕の貧しき體、此の女嬖れし姿をつく／＼詠めて涙流し、さながら昔を忍ぶ思入、目見え物こそいはね、人に同じく氣を兼ねたるぞ優しく、責めて是を折々の慰みに、憂きを忘れて經年暮れて、明の秘一人の男子を設け、名を菊之助と呼びて、秘藏是に代ふるものなしと寵愛するに付けて、昔の暮しの程思ひ競べ、果報なき子の行末まで哀れに不便深く育てぬ。或時此の子を寐させ置きて、鄙びたる所の習ひに、朝暗きうちより茶沸したるに呼ばれて、四方山の物賸のうち、何もの事を思ひ出でけん、此の猿留守の中に湯を沸

し、湯玉のたつを見て、盥に丁度一杯とり、何の加減見る迄もなく、此の子を丸裸になし、内義取捌き善く見
 覚えし通りに、湯の中へ入ると、喚といふ聲ばかりに息絶えぬ。是に驚き夫婦走り戻り、取上げて見れば、
 はや茹海老の如く、皮も讀かず一目とも見ず、さても死なしたり、我が身に代らば今一度佛に見えたしと、
 聲をあげて嘆くも道理。次郎右衛門も呆れ果て、如何に畜生なればとて餘りなる事共、よし／＼因果の生合
 と諦めながら、涙は止らず、内義狼を捕へ、兎角汝は我が子の敵、今打殺すと木刀振上げしを、次郎右衛門止
 めて、尤もとは云ひながら、最早返らぬ事に殺生するも、却つて菊之助が菩提の爲悪し、奉公と思ひて爲たる
 べけれども、流石智恵なきは詮方なしと云へば、猿涙流して手を合せるも又酷く覺えて、先づは野邊の煙と
 なしぬ。其の後此の猿七日／＼に墓所へ参り、折々の草花、山に入りて櫛手折りて爰に挿し、一日に三度づ
 詣でて涙を流し、百日に當る朝、水心靜か下手向け、竹の鉾にて、自ら咽笛突き通して果てぬ。是を見て夫婦
 子に離れ跡には、賣つて此の者慰みぬるに、其さへ此の有様、さぞ迷惑に思ひ込みし心根を感じ、右の墓の
 隣に猿塚つきならべ、二人も發心を遂げ、彼の庵に絶えず題目唱へて、法華讀誦の聲止まず、跡弔ひしと語り
 ぬ。

五 見て歸る地獄極樂

僧佛を賣りて世を渡る、四國の海の深き巧をして、淺き衆生を迷はす事あり、是皆心の闇。秋も末つ方に風絶

えて、類船爰に寄せ、泊の磯といふ所に一夜を明し、山は南に讃岐の國の浦氣色、松も殊更に年経り、一入
 めに續き、是なる苦の屋に、海士の子共の集り、今佛法の責なるに、佛壇を飾る三具足の鶴龜、華足などを
 そこ／＼に抛げやりて、草庵自ら荒らし、邪見の濱里見ゆるに痛ましく、かゝる狼藉はと鹽木樵る翁に尋
 ね侍るに、重荷を岩に打かけ、眉毛の白うして長さを抑撫じ、扱に誹手を助けて徘徊ひ、子細を語りけるは、
 過ぎし年、此の所に空樂坊とて修行に功を積み、不思議様々振舞ひ、假令は金比良の獄、三十餘丈の所を鳥よ
 り軽く飛び、法談の詞に花降り、聽聞衆の中の善人惡人を見通しに、萬づの失物まで此の僧に頼み、其の
 外にも奇妙を見せければ、近郷の優婆夷群集して尊み、日に増して繁昌、始は篠竹四本の假葺なるも、後には
 自ら結構に美を盡して此の一庵を建立し、今年の春より、先達て六月十五日の日に、往生すべしといひ觸
 し、前かどより其用意に臨終壇を飾らせ三ヶ國觸れさせ、月日早く流れて程なく水無月中旬になる時、近國よ
 り集る人數萬人に及びければ、四丁四方に矢來を結はせて、兼ねて其の儀式を飾り、十五日の朝、裝束をあら
 ためて床に座すると、西の方に向ひ、低頭合掌して快く終を執れり。遺言として椅子に載せ是を拜ませ、三日
 の内は結縁の爲と、勿體なくも其昔靈山の釋迦入滅に異ならず、群集して賽鏡山の如し。さて十八日の朝、
 弟子なるもの數へに向ひ、常々空樂申されしは、遷化したりとも、暖ある内茶比すべからずと云はれし、不
 思議なる事は今に暖冷めずと云へば、若し萬一蘇生し給はど何かあらん、かく有難き御僧の亦世に出で給ふ
 とも覺えずといふ時、息出で初めて、夢の醒めたる心地なりと眼を開き、さても我れ此度地獄極樂を見て來り

しに、日比各に教化したる通り、後生の願ひやうにて、入寒入熱の苦みに落ちんとも、金銀眞砂の樂みなる所へ行くべきとも望み次第。見せらるゝものならば、疑ひ多き者を連れだちて見すべきに、構へて何れも嗜み給へ。其の證據に閻魔大王より御判を賜りし、是見給へと背中を脱げば、七の推に王といふ文字の下に大きな判据りたるを皆々拜みて、今まで未來のあるか無きかと疑ひを爲せしものも、是に我を折りて信心を起しぬ。此の事國中に匿れなく夥しかりしを、國の守より御尋ねあり、此の僧を召され、末代に及びて此の類の事有る可き事に非ず、其の閻魔の判改むべしと、裸になして見れば、黒く煮込みたる様に有々とあり、洗へども落ちず。是は合點往かず、重角一責責めて見よとありしに、水をくれても落ちず、鐵砲にかくる時、最早何を匿し申す可き、此の命ありての事、跡方もなき作事なり、あまり貧に生れつき、錢の欲しき餘りに、かく偽りを巧みたりと云ふ。然らば其の王の判は如何なる事ぞと云へば、三年以前背中をほらせ入墨致させたり、さて高き所より飛びたるは如何にと尋ねけるに、是も二年の内、高き所から再々飛びつけ、練磨の功にて下へは飛べども上へはならずと、有りの儘に語るを、其の儘成敗にもすべきを、其さへ出家といへる體にて、うつろを作りて縛りながら乗せ、行方白浪の定めなき浮世に、かゝる事もあるぞかし。今は云ひ出す人もなく、残る物はあの庵に、立像の彌陀如來も是に信心を失ひ、誰参り下向の者もなく、氣疎き破窓に月の夜なく通ふのみにして、風の音も凄く、晝に童子の遊ひ所となりぬ。誠に佛法の瑕穢なりと語りぬ。

【〇以下改訂】

懷硯 卷五

一 佛の似せ男

西の海邊が原にあらはれ出し似せ男ありける。旅の夕ぐれをいそぎ、日向の國橋の里といふ所に一夜をあかし、折ふしほとよきすの田舎ごゑさへめつらしく、浮世の事どもかたらせて聞に、いまだ此程の事として、宿のあるじのことばに子細を語てはなしけるは、是より一里ばかりみなみに落水村といへる所に、覆森與太夫とて庄屋につゞきて、田畠の高をつくりて有徳なる百姓あり、よろづの事かしく天命をかんがへ、下人とおなじく耕作をばげみぬ。ある時岡山に行て下刈をさせて、下人下女まで眞柴いたよきつれて、歸るさのあとに独残りけるが、其合におよびても宿へもどらざりしに、おのゝ／＼驚きそこにたづね行しに、形は見えずなりて、梢の鳥啼あらしひ、是にとふべきたよりもなくて、みなく不思議をたてしに、小徑のかたかけ道なきかたの末に、茶小紋の羽織あらく抓やふりて是のみ残りぬ。いづれもなげく中に、女ことさらに身をもだへ、諸神を祈りそれより廿日にあまり、國中の深山海邊をさがしけれども何のしるべもなかりき。是非なき愁のかた手に三才の二子をそだて、かひくしく其跡をたてける。里女にはすぐれてうつくしければ、所のわかきもの此後家をしのぶにすこしも取みだす事なく、年月を累ね、程なく九とせの



過るは夢なり。其また村つゞきに、齋越傳介といへる小百姓、四五年の不作にあひ日比かくまへのあしく、妻子もそれ／＼に見はなち、おのづから袖乞となりてさまよひありくうちに、安藝の國宮の市にまぎれ、千尋敷といふ堂に丸ねせしに、あわれはおなじ袖枕のほとりに、醫まさ／＼と古里をおもはれける。村の與太夫に聞ければ、あけほのをまぢかね彼がおもかけを見るに、年はふれとも形はたがはず自然の涙こぼれ、何と與太夫たがひに此あり様はいかなる因果そと、すがり付てなげくに、此男けんによるなき貝して、我名は與太夫とはいわず、いかなる事に尋ね給ふぞ、我生國は大隅風の森のほとり櫻村といへる所の者なるが、一門ちり／＼の身となり、名は小平太とこそ申侍れと身の上委細にかたりぬ。聞ても不審はれがたし。世に似たものこそあれ年の程貝かたち、左のかたの首筋に打疵のあとまで、與太夫といへる人のおもかけと、願手を打て世界はひろし、是程似たる事はと申けるにそ、小平太興をさまし、其與太夫といへる人はいかなる事そと聞ける。傳介かなしき中の永物がたりせしは、抑與太夫といふ人、日向國たちばな村の大百姓、親類の事ども妻子のなげき、九年あとにくれてんに見へざる事、つど／＼にはなしけるうちに、小平太傾道ものにて、我その與太夫に形の似たるこそさいわゐる、其里に行て其女房をたぶらかし、世を樂々と渡るべき悪心出来、なを傳介に様子と聞とけ、爰をわかれて日向の國ちかく分入、わざとらつけを面につくり、狗品につかまれしものと折／＼詞のすゑに申せば、いつとなく是をさたして與太夫こそ其そこに天狗がおとして世に命はありけるぞと、いふ程なく女はつたへきよて、あるにあられず。

行あい見しより前後を忘じ涙に暮て、むかしの與太夫に思ひこみて我里の屋にいざなひて歸り、ふた／＼び逢事のうれしさと、あたりの在所より従弟の末まで寄あつまりて、祝の振舞酒事あり。扱も年月の難儀にや披れ給ふ事よと、悦泪をながしてみな／＼歸れば、女房こしかたのうき思ひを語り、忘れがたみとおもひてそだてし與太郎もはや十一才、此成人見給へとうつりかはりし、四方山の物がたりに夜ふけてめつらしき添寝のまくらをかはし、きのふけふとたつは程なく、二としめの春與太郎が弟も出来て、なを／＼落つきけるに、其夏殊さらの旱にて、天下の百姓雨を乞龍神をおどろかし、標々おこなひありしかども其しるしなく、青田の早苗はさながらの枯柴のごとくなりし時、此榎村の御社かたじけなくも住吉大明神の御本所にてわたらせたまふ。既に十一ヶ年跡の干魃にも當社を祈り奉るに、たちまち其利生あつて万民を潤せり。其時の願書も與太夫書る吉例なれば、此度も幸堅固にて居ること吉左右、書せらるへしと呼出に、小平太元より無筆にて、此時目のさやのはづれし男ありて是に氣をつけて、與太夫にあらぬ事を見出しけれども、女房合点せず、物書たまはぬは天狗につかまれて氣のぬけたるゆへと、そのけぶりいふものあれはかへつて腹をたてて泣かなしむを、影にて笑らひて面々の好々と、そのなりけりになりてかまふものなく、今にかたり傳へり、世にはかゝる事もあり。

二 明けて悔しき養子が銀笥

世になき物は江の刀と化物と人の内證に金銀ぞかし。いづくはあれと江州の大津は、山市晴嵐渡海歸帆、此津の繁昌馬借務なく、逢坂の車旅人神をつらね、これや此關戸さぬ御代のためしなり。安に篠原屋の勘吉とて北國の商をして一たびは家さかへけるが、いつとなく身味うすくなりて、世間向はむかしにかはらず、陰分氣がさに取まわしけれども、おのづから不自由さあらわれかゝれば、日比の律義にかわり、人はかならず貧より無分別をたくみぬ。勘吉ひとり娘十六になりて形も大かたに生れつきぬ、母親は過にし春の末世をはよふして、其後は窮そだちによるづの賤しげに、または徒にもなりぬべき事をなげくうちに、旁々よりいひ入れれど、かつて其談合にのらず、我うちへ似あひの養子をねがひぬ。見え渡りたる所は棟たかふして度ひろく住なせしが、世上おもひの外銀が寛文なき世とはなりぬ。入笠の數金にて此家を編すべき事をたくみ、拾貫目入十箱中にはけもなき物を仕込、此瓦石におとれり。いかなる聲にてもあれ銀百貫目娘に相添、家屋敷ゆづりて、此身は其日より愛心の望みといへば、みな然の世の中、此家養子をのぞき事難を知らす。其中に志賀の浦里にかくれなく松崎九助とて其一村の主筋めなる家として内證さびしく、表向の虚大名なまなか目那様といはるゝうらめしく、いまだ柱る妻女もなく渡世何をいとなむべしと思案なかばに合しぬ。是を肝煎を身過にする古手六次といふ男、勘吉が事を聞てよき勝負と心かけしに、おもふまゝならざる方もなくかけまはる時、九介と前かたより近付なればさいわるにおもひて、此段々かたり、今三拾貫目さへ持てはいれば、家屋敷と當銀百貫目を美目形すぐれたる娘とを其まゝ

わたし、殊に聲入の夜より勘吉は愛心の望みなれば、當分の見せ金さへ三十貫目調へたまへば、此縁證は丸取、か様なる結構なきはまた日本にふたつとなき事、殊にこなたの年比と能夫婦、それは打て付た事と仲人口に聞をつきまけてすゝむるに、九助も聞とはや心ときめき、是は成ほど相談いたすべしと、伯父に丹下屋とて産根の家申手ひろくする商人、其日に志賀を出舟を借て急ぎ、六次がはたし通を一々かたれば、それはたのもしき身体相違あるかなきを問合せ、しかと治定したる上ならば、當分の見せ銀は、何時なりとも借出してつかはすべしと、言合たるを悦び志賀に歸り、六次を呼にやりて見せ銀はいかほどにも借べきとの事といへば、扱は目出度、此方にすこしもいつわりのなき事はわたくしのうけあひます、急ぎ銀を取らせ給へ、一日はやいがよしともみたて、程なく限さだめ聲入にきわまり、彼三十貫目をもたせ遣はせ、首尾残るところなく千秋樂うたひて祝言は相酒、勘吉は其夜より只今財寶わたすと、藏を開かせ有銀百貫目をたしかに見せていづちへか行ぬ。かねてより此聲悟さだめて諸國の體仁を拜みめぐる、修行よき仕廻とらやむ人多し。扱九助は商に取づくに、諸方の同居共闘つけて何をかけても氣遣なし、まづ有銀が三十貫目は目に見えた身体と、方々より米薪柴何なり共好次第に、たのまねども人が肝前千貫目が商とかる様仕かけたるに、九助おもひの外の仕事、まづ見せ銀は濟べしと右の三十貫目をは箱のまもたがはす伯父がかたへひそかにすまし、いまだゆづりの百貫目には手もつけず、外よりきたるあきなひものにて和徳大分あがり、此比まで思ふやうにつかは内證を、江州に遊女團奕とも瓦浴くとやり

拾、五貫目三貫目の當座借銀の分は人も氣遣せず、みづからも水の泡ともおもはず、次第に悪所にはまり
 よからぬはづみの募出し上に、仰山商物かきみ舟九艘に積せ北國へ廻しけるに、例の比叡の山嵐に打返
 し、以上三十二人の水主一人もたすからず、漸船頭片生になつて竹生嶋に打よせられぬ。此時諸方の賣
 物うけ込よろづ損銀四拾八貫三百九拾匁、俄に是をたてねばならず、かさねての爲なれば成程きつと扱ひ
 て見せんと、藏をひらき彼百貫目の箱を五箱取出させ、封をきつて見るに是はいかな事銀にはあらず石瓦
 なり。九介工夫におちず一箱く明させけるに、四番目の筒のうちに通の文あり。我はしめは身体人に
 まけずゆづり銀三百貫目ありしを、修學あしく次第にへりて只屋敷ひとつ残り、内證人にしられんも口
 おしく、さいわる油の娘に此銀をいつわりて聲を望みぬ、夫婦は二世の契なればたゞ不便とおもわれ、
 此事人にしらせず持參の數銀にて跡をたて給へ、近比はづかしけれども世は滅もの、返すく頼むと書と
 どめたり。九介つくづく思ひかへせは無念やらことはりやら、さためかねて女房に此事をかたれば、わた
 くしは少しもしらする事といふに、恨みて詮なき事ながら此百貫目をあてにこそよろつ大かゝりに仕ちら
 し、今さら人がゆるすべきにあらずと、案じわづらふにはや大節季の程ちかく、銀をせがみかけを乞
 人のしりたる百貫目をさし置て、人に借べき手だてなく、安否爰にきわまりて、師走廿八日、不埒なる
 に人も不審をたて、とても不子ならず節角聲に入壹年たゞぬに引自合七拾貫目。今はむかしの在所はなつ
 かしながら、此顔では歸られずと別して寫を出、高觀音の山下陰に行は、融の非人ありしにことば



をかけ、扱も其方は何として其なりになられたぞ、故里にて朝夕うわさにて行衛まぼつかなしといひくらすに、爰にて逢は誠音様の御利生、此寒きにいたはしや、これ著給へと、羽織を脱て著せ酒を振舞ての馳走に、此を食自分におぼえはなけれども、是は過分とよい別荘にあいさつしたるに、たわひなき程に酔せ、著物帯脇指頭巾まで遣ての上、嘔ぶえ突とをして、自身は北國に立退ぬ。跡にてこれを見付、やれ九介こそ自害したれと沙汰ありて其なりけりに済ぬ。其後不め郎の茶屋して又此女房をらしとなり

三 居合も闘すに手なし

浪の音ひよきの灘を過橋渡津に舟をよせて、こゝに一夜の餓まくら風のくたびれを助る橋風呂といへるに行て、入そむるよりいづくも同じ訛言、諸人のつきあひ、あるひは上り鼻うた芝居の狂言ばなし心くの中に、此程の事とて此所の喧嘩のあらましかたる人ありて聞に、いかなる律氣者も色町にては、おのづからうはきになつて儲とがめ訛論、人の山をなす思ひの詞、こゝの傾城町の事とよ、毎夜寝ぎ中間の男風流草枕夢藏、高少の久八、釣鐘敷石衛門、閨處の八左衛門、彼是四人、遊はつになし、人を打鬪して是を慰となして所のめいわくたひくなれど、入みな怖れてたてづくものなく、日を遣て此組下八十四人、悪はかたむき安き世なり。ある時備前よりしひて色遊に連る男四五八、彼はさ中門に出合、すこしの事をいひ分にとりむすひ、たがひに髪はやめかたく、控台で打あひけるに、備前の者と

も、一命ををしますかたはしより續例し、或は子負、または仰れて息絶難儀の所へ、尾上八九郎といへる穿人かけ合せ、まづは以品具、眞中に立入抜ひけるに、死人はなくて各々左右へ別れ、備前の人は是を仕合、さはさ中門はなき命をのがれ、皆く宿へは歸らす、ひそかなる寺に行て面痕痛所を養生しけるこそ身より出せしとかめなれ、而健になりて彼穿人八九郎に一礼も申すべきを、かへつて書をたくみ、年來我くが男風流此度の卑氣とる事の口をし、八九郎此まゝおかば世間へさたして生たる甲斐はなかりき、何とぞ手だてをまわし、討て捨んといひ出すより、各々同心して内談きわめけるに、中く易容討るゝものにあらず、勇力人に勝れ兵法師練して朝暮其身に油断せざりき。いつその時面と見合すうちに、山は紅鶴欄のさかり夕日ことさらの折ふし、八九郎人をもつれす、驚たとり行を、釣鐘の敷右衛門つけ出し、俄に竹葉の一滴をとゝのへ、跡より向ふかく分入て八九郎を是非に引き、おもしろ可笑目になして、挨拶入かわり立かわり、前後わするゝはかりにもり流し、我しらす草まくらの所を、各々鋒先をへてさし殺し顔の皮をめくりて滴なる谷陰に捨て歸りける。其後衆人の見出し此沙汰つりて、諸人見にまかれとも、面損して見知がたし。こゝに八九郎が妹お七といへる女いまた十六成けるが、兄八九郎宿に歸らぬ事をふしぎに彼山に入て死人の跡を見しに、奥嶋の船入に纏子の袖裏、我手にかけて仕立着せましたにうたがひなく、こゝろは空になりて死骸に取付んとせしが、外より見るを忍ひしはらく浦をおさへ、何となく私宅へ歸り母のなげきを思ひ此事をかたらず。其日の早く身に門をかけ、破れし笠に貝をかく



し相乞の如くなりて、八九郎死骸より遠き松陰に打臥て、見物のありさまを見とがめけるに、みなくあわれとはかりいひ招しばらくは見る人もなかりしに、血氣さかんの若石一日に三度まで見にまかりて是をなげかずわらず、人立の所をはなれて、とかく神ならぬ身なれば人間はだますに手なしとさゝやきて口を、とくと聞と、けて跡より其宿に付込、それより私宅に歸り母に此事をかたりて、人しれず訴状をしたため、所の奉行殿に言上、申てなげき奉れば、彼石ともを假に以て穿鑿におよひけるに、證據たゞしからねば爰をあらそひぬ。されども山城町の喧嘩、世上にかくれなく、八九郎其時出合のつかひし事より吟味仕出して、獨くたつね給ふに、たゞ詞相違してあらはれかゝり、さまざまの詮議に於て人を殺せしその科をのかれず、此中聞知らず世の長とはなりぬ。彼娘が母、さすがは武士の家に生れ、女ながら智のり勇ありとて、歴々の知侍是をもらいて一子に嫁合、母も一所に引とり孝を盡し侍る。哀や人の身の果、八九郎生國は此間此城の若なりしが、今播州の官相、空押の土とはなりて恨のみ残れり。

四 織物屋の今中將姫 (〇此一項未改訂)

古代より袖を入れず、襟の相茂り位山の氣色名にふれて面白く、折田の涼しさ、夏なき飛脚の山里に一夜を明しけるに、颯の手業には優しく、土機のはの音、枕に響き渡り、夢も結はぬ旅宿の、主取交せての物語の次でに、不思議なる事をこそ申し侍れ。此星に岡村善太夫といふ夫婦、四十餘歳まで一子もなき事を歎き、

岡村善太夫の宮に宿願をかけしに、祈る印のまうし子其の程なく誕生して、歸には並びなき形の娘なりき。次第に成長して、五歳より教へぬ道の御書暗からず、十歳にして詩歌を述べ、十一より所習ひの袖島習みけるに、さのみ餘の女に手業の遠事もなくありながら、人の三日に一反を織下すを、半日に織りて、然も辨れて美しく、是故此の家富貴して殊更佛の道疎からず、人皆申し習はして今中將姫といへり。此の娘母月御日に、八町の宮へ参詣しけるに、岡村隔てし通を一日の内に下向し侍る。此の事疑ひて様子を尋ねけるに、尾張の事ども道すがらの有様全細に語りけるを、其の後聞き合せけるに、少しも違はず、態奇異の思ひをなしける。程なく十五歳になりて、惣にも有まじき程の美形、愛の山家に庶れ、程に望み入縁の願ひ、若共其の是を懐む限りなし。喜太夫夫婦次第に家榮えければ、自ら娘自慢して世上を見合せ、今に罪といふ者を定めず、彼是口合せ、里親きの長に善兵衛といへる人、萬づに不足なく、材木の商賣して世を渡りけるが、是に望まれ、一子伊之助にめあはせける。時に不思議は、此の娘最愛の心川でしより、熱田へ詣での通力も失へり。娘の早業、常の女の如くなりて、形も何時となく口しく、山家育ちの口信となれり。世にハ斯かる若代もあるものぞと此の事を語りぬ。

五 何代の盛は江戸櫻

口じ口もよき所に咲て人に口ちるゝこそ花も仕合たり。ある時おさしに行て、江戸のほとりに一夜を明



し、折から八十八夜の朝霜紙の草鞋に踏分、上野の春に傾り。さなからよし野を爰に、花の都もおよばさ
 りし氣色、黒門向より末の松陰まで、唐織の幕うたせ、袖累ねの衣裳つくし、鹿の子ならざる小裙もな
 く、美をかざりての女酒もり、撥音の色糸あるは一箇切に吹たてられ、裾かへしの紅裏なとの見へ、か
 る法師の身さへ心うかくとならぬ。また糸櫻の影に散まへををしむ少年のまじり衆道はこゝこそさかり、
 覆つよく情ふかく、是また見捨て歸る雁つてもなく、筆のはやしの墨染櫻のもとに、玉むし色の襦子の廣
 袖を著て、四條跡さがりに刺なし、金銀の一差、鬘敷せて座して艶しき花は見すして、古文の上巻を
 ひらき朱をもつて頭書、己が宿にてもなるへき事を、無用の出過ものとはおもひながら、千差万別の人心。
 ことさら天下の町人、おもふまゝなる世に住るは有かたき時津風しづかに並木櫻の影に通町の中橋あたりの
 何某、嘆き哥に四五人頭をふつての手坊子、いづれか當世男ならざるはなし。酒も半の所へ十七八なる
 若衆、空色の小袖に唐鹿の紋所甲子子の袴、股だち取て抓さしの大小、淫世笠にて良をかくし、羽織は小
 者にもたせ、彼小哥立問せしか遊園もなく其座に入て、醉に座して捨盃を取あげ、給仕せし小坊主に
 つげとてさし出しければ、こぼるゝはかり盛かけ、各々うつくし過て良をさましにける。其座に伽羅屋の
 新吉といへば華男に、二世までもおめられたきとて、飲饒して手より手に渡しけるに、いづれも醉のまぎれ
 に無分別に言を立、御言のことじめ、三四とらたひける。其後盃かすくにくめぐりても、此若衆
 笠をとらず、さらに心うちとけず、昇かたまで歸りもやらす折く醉狂に見せて、新吉が膝枕して爰をか

りの情と空肝せしとは思ひながら、嬉しき袖に餘りたはふれも今ぞと思ふ時、江戸に住透の付合風くは
 づして残るものとは松の夕風、非當取置親仁ばかりしかま耳りとく、首尾ならば此時になりぬ。彼若衆
 ほとりを口合せ、花よりさきに人の散事を悦び、ひだりの袂より金子三百兩つゝみしを取出し、新吉が膝
 の上に置く置けるは、すこしさもしきやうなれとも苦しからぬものなり。其後ちちかきさやきは、我親
 とてゝ和舞もなく、他に朽ぬる花なれば行末までを頼むなり、不便をかけて見捨給ふなど、良にまことをあ
 らはし、少なみだぐみし戀といふたゝ中、其まゝ消たき程になりぬ。さまざまちかひして命をかぎり
 と申かせしは、前後のわきまへもなく愚なる事ながら其身になりては道理にそありける。しばしのうち
 に打とけ忍び等も脱、こゝろの程をあらはしけるに、此人まことは女小性なり、新吉にいまだ婦妻のなき
 内證を能しりてかくは仕かけ侍る。此面かけを思ひ合すにいつぞやさるお寺にて見しやうにおもふ程それ
 なり。とかくはふしぎはれかたく、我宿につれて子細をきくに、腹にはけありて産月もちかき難我をおも
 はれ、長老様のをくられけると、思案して仲人なしの縁組。是仕合のはしめ、近所へひろめて千秋樂をうた
 はせける。相生の松風なを千代かけて夫婦の中橋に住なして、東の伽羅屋と其名を殘しぬ

6184

昭和二十一年六月十日印刷
昭和二十一年六月二十日發行
(一〇、〇〇〇部發行)



元給配
日本出版配給株式會社
東京都神田區淡路町二ノ九

西鶴全集第四卷

定價 金十三圓五十錢

編纂者 正宗敦夫

發行者 日本古典全集刊行會代表者
坂上眞一郎

印刷所 東京都小石川區初音町二〇
森岡印刷製本工場
代表者 森岡憲三郎

發兌 東京都神田區西神田二ノ四
日本古典全集刊行會
電話九段(33)一五九三番

終

